兵庫県現代詩協会

会報53号付録・会報バックナンバー③

2023年7月1日 発行・時里二郎

★第28号（2010年12月6日発行、8頁）

①〈報告〉▽第28回理事会が開れた。この夏の苛烈な暑さのせいか、今年の紅葉がとりわけ色鮮やかだ。11月23日（祭）、県民会館12階会議室において午前11時より理事会が開かれ、各事業担当理事より中間報告が行なわれた。（出席15名、委任状4名）。▽新年度の事業内容について①現在隔年に出版しているアンソロジーを県の助成金に左右されないで、毎年発刊できないか。②毎年三月に実施してきた企画展を来年度あたりでひと区切りをつけてはどうか。③名誉会員、顧問は、役員選挙の被選挙権もなく、運営から遠ざかってしまわれる現状、特に名誉会員制度について。現在会員184名のうち、すでに登録されている22名に加え、来年度にはさらに6名が登録されると事務局より報告。会則の見直しが必要との意見が多数あがる。④「詩のフェスタ」の今後の開催についても要検討。▽来年3月15日から20日に予定している企画展は〈「蜘蛛」の仲間たち展〉とし、記念講演会には伊勢田史郎、安水稔和両氏を招くことなどが決議された。▽同時開催の詩画展へのご出品をお願いします。また、「ひょうご詩の現在展」も併催。②〈報告〉▽「詩のフェスタひょうご2010」が開催された。まず記念講演。第11回目となる「ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご2010」が兵庫県民会館パルテホールで開かれた。午後一時より表彰式。第一部は松尾茂夫氏の司会で進行。実行委員長三宅武氏の挨拶に続き、長年教職にあり、その傍ら詩に情熱を傾けてこられた丸田礼子による講演「感受性という贈り物」を聞いた。感受性が鋭敏だと生きづらい。一体感のある人間関係が土台にあるとき、しつけは身についたものになるが、子どもが大人に不信感をもっている時は、逆効果にしかならない。子どもは大人の言うことではなく、する事を真似る。学んだ知識は忘れても、幼少期に心にゆたかな思い出や美しい感動体験を豊富にもっていると、困難をのり越える力になる。「信念をもって全力投球で」をモットーに、子どもたちを見守り、育ててきたつもりだったが、子どもたちに育てられていたと、現役時代を回顧していた。途中何度か引用された茨木のり子の詩に彼女がどれほど共感し、救われたかが、お話からぴんぴん伝わってくる。「大人になったって　どぎまぎしたっていいんだな」と。その後の懇親会には受賞者を含む20名が残った。（事務局・玉井洋子記）

③〈評論〉「君本昌久の仕事」季村敏夫（別枠にて表示）
④〈エッセイ〉「山の風景」小西たか子
⑤〈エッセイ〉「おもちひとつで」牧田榮子
⑥〈エッセイ〉「旅の愉しみ」瑞木よう
⑦〈詩誌紹介　39〉「ＥＮＴＡＳＩＳ」を始める　福井久子

二〇〇九年の春頃、山本美代子さん、田中荘介さん、それに私の三人で詩誌を出さないかという話になり、お目にかかったり、電話連絡を重ねたりして、その年の十一月に発刊のはこびとなった。その経緯については「ＥＮＴＡＳＩＳ」創刊号の　「余材」の頁より、その一部を引用すると、

平成10年に「たうろす」が廃刊になってから、早くも11年が経った。廃刊前後には、詩人たちで詩誌を出したい、出そうという話もあったが、現実とならず、そのまま時が過ぎた。――中略――暫くは、考え直す時間、自己の詩心の熟成をうながす時期ととらえていたが、やがてどなたも発表の場を探して、思連から刊行された『亜』を重要な雑誌として掲げた。二番目は『横顔』である。関西学院が原田の森にあった頃の学生から刊行されたこの雑誌には若い竹中郁も関わっていた。浅野孟府、岡本唐貴、川上澄生らの斬新なデザイン、表紙木版にみられるレスプリ・ヌーボーは、一九二〇年代の世界同時性にあふれ、看過できない。三つ目は、ダダイズムやアナキズムなどのアヴァンギャルド思潮が神戸にまで及んでいたことを実証する『ラ・ミノリテ』『布引詩歌』『悪い仲間』、石野重道の詩集『彩色ある夢』（序文は佐藤春夫）などをピックアップしたことである。さらに、東京の美術雑誌だが、日本画家の玉村善之助らが関わった『エポック』、『エポック』の流れを受けた平野上祇園町の「エポック神戸支社」の高木春夫や近藤正治らを竹中郁の背後の受川三九郎らとともに留めてみた。

さて高木春夫らの動向だが、『山上の蜘蛛』と　『窓の微風』を上梓した後、北園克衛が本名の橋本健吉で編輯した『薔薇・魔術・学説』（一九二七年創刊）のなかで発見したので紹介したい。「高木春夫は神戸湊川癲狂院でガンドリグレインのやうに正気に1秒を3分のやうに這ひちらしつつある……同刷の詩文は僕の手もとにあった6ケ月前の哀しい彼の半狂詩だ……やはり神戸で近藤正治は自己のゲイジュツと人世を懐ろへゴツチヤに治めてゐる……野川隆・坂本謹は8月中旬モスクオへ散歩に行ったが青いステッキをついて近日帰郷する筈」。野川隆は、その後コミュニストとなり満州へ移動、敗戦まぎわの外地で獄死といってよい最期を迎えていること、付け加えておく。〈第28号〉

③君本昌久の仕事

季村敏夫

君本昌久は、『蜘蛛』のコンセプトを創刊号（一九六〇年）のあとがき（九二頁）に記している。

要約すれば、六十年安保闘争が明らかにしたことをどう背負うか、神戸モダニズムの検証、そして、「無名のエネルギー」の顕在化としての神戸詩史作成、以上の三点である。ここでは、五十年前に君本昌久が提言し手掛け、途絶したまま現在に到っている神戸の詩史に関して述べてみたい。

二枚の詩史、年表が残されている。戦前篇と戦後篇である。総力戦だった昭和の戦争の敗亡を境に分けられている。戦前篇は『兵庫の詩人たち』（一九八五年）、戦後篇は『神戸の詩人たち』（一九八四年）、いずれも安水稔和との共著で、版元は神戸新聞出版センター、巻末に収録されている。

二〇一〇年十一月、倉橋健一から依頼され、神戸女子大学で戦前神戸の詩の同人誌展を試みた。私の蒐集した雑誌の一部を展示することになったが、おもえば、記憶の残骸をいとおしむ君本氏の蒐集行為はもの狂いに近いものがあった。だがそのほとんどは散逸し消失、荒野に沈黙がなり響く。

詩年表を拡大し、会場の正面に掲げた。中途で終わらざるを得なかった無念さをひき受ける意志をこめて。同時に、君本氏の姿勢への敬意を、ささやかながら表明したかったから。

詩史を作成するとは、いかなる事態なのか。年表に関する君本昌久の仕事は荒い。おもい違いや誤植なども少なくない。だがこの場合の荒さは否定されるべきではない。あらかな精神に襲われ、その渦に飲みこまれたままの乱れのようなもので、生き残る者にとって、ひき受けねばならない塊りとして横たわっていること、いうまでもない。荒さは粗雑を意味することなく、痛ましい響きさえ秘められる。刻みこまれた言葉「無名のエネルギー」、累積する死者の記憶の襲来に身を投げて敢行された素手の荒わざ、この核心を背負い、君本氏作成の原型に補訂を施し、詩年表を展示した。

その改訂版の上梓を、現在わたしは扉野良人と企画している。できるだけ多くの同人誌の書影をスキャナーで読みこみ、カラーの図版として収録、視覚性に眼目を置きながら。さらに特徴的な点は、アナール学派ではないが、詩の世界の外部である社会との関わりを積極的に導入しているところである。火災や身投げ、カフェーでの乱行など、とかく見過ごされがちな社会の無意識の切断面と文化の様相を絡ませ、いまなお無念のおもいでさまよっている君本昌久に捧げようとしている。

扉野良人は山本善行主宰の『スムース』十二号（二〇〇四年）で「蜘蛛出版社ノート」を書き、突如わたしの前に躍り出て来た得難い詩人、徳正寺（下京区富小路四条下ル）のお坊さんである。

改訂版は、君本昌久が見落とした視点を補うところに力がそそがれる。東アジアへの眼差し。竹中郁や福原清らの海港詩人倶楽部がうぶ声をあげた一九二三年、安西冬衛や北川冬彦らにより大

わぬ場で、その方々の作品と遭遇するようになっていった。銅林社の「ガニメデ」で数年前から山本美代子さんの詩にお目にかかるようになり、私もその詩誌に発表する機会があったこともあり、直接ある喫茶店でお会いした。結果、我々独自の詩の発表の場を確保しようということになり、「たうろす」同人であった田中荘介さんを加え三人で話し合った・・・

詩誌名の候補として三人が案を出し、その中、山本美代子さん提案の「ＥＮＴＡＳＩＳ」に落ちついた。ＥＮＴＡＳＩＳとは円柱の中ほどにつけたわずかなふくらみで、視覚上の安定感を与えるために施されたもので、ギリシヤ・ローマ・ルネッサンス建築の外壁面に用いられたと広辞苑にある。法隆寺金堂の柱にはこれが胴張りとして用いられており、シルクロードをはるばる運ばれてきた東西文明融合の象徴でもある。「くろおぺす」、「たうろす」の流れを汲んでいる我々三人は専攻も詩的傾向も違っているが、この新しい詩誌でどのような詩的空間を生み出し得るか、その可能性をかけたのが、このＥＮＴＡＳＩＳの誌名である。年二回の発行をめざし、二〇一〇年も一一月に三号を出した。私学会館一階の「はなわグリル」で合評会を催し緊張感のある関係を保ちながら楽しんでいる。

⑧〈追悼文〉「高須剛という詩人」尾崎美紀

姫路から相生に移ってすぐ、新聞で「相生ペンの会創立」の記事を見つけたのは、学生時代の続きで詩を書き続けていた私が、さてこれからどうするか、と見知らぬ町で考えていた矢先のことだった。そこで知り合ったのが高須剛さんだった。高須剛さん四〇歳、私は二三歳の春のことだった。そして、そこから四〇年の長い付き合いが始まることになる。

彫りの深い顔立ちに、おしゃれなアスコットタイ、手にはいつもパイプを持つ高須さんは絵に描いた様なダンディさで、その詩からは想像できない柔らかさで周りの人を魅了した。

それまで一人でポツポツ書いていた私にとって、高須さんの詩は衝撃的だった。選び抜かれた言葉と行間に滲み出る決してぶれない主題、しかも詩の入り口に立つ者を疎外しないスタイル。『蟻族無頼』『夢の中の日常』『哀傷詩抄』など、いずれも労働者であるという軸を足元に埋め込み、そこから一歩も辞さぬ構えで世間と渡りあう詩は、もっと広く読まれていいはずの詩人であったと悔やむ。

「わたしは人のように時代の予言者や、歴史の旗手にはなれないが、坑夫のようになにかを掘り起こす作業ならやれそうだと思う」と、『夢の中の日常』のあとがきにあるように、石川島播磨造船所での労働者としての詩人活動、民族差別への怒り、不当な権力への抗いは、まさに坑夫が打ち下ろすツルハシのごとく彼の詩を読むもの全てに響いた。

大きく入り組んだ湾の町は、しかしなかなか文化が根づかない町でもあった。高須さんが難病で長い闘病をやっと終えた頃、詩の仲間が一人減り、二人減りの頃だったと思う。「もうやめようかと思ってる」と、いつもらしからぬことを口にした。少し気弱な詩人に、「高須さんから詩を取ったら、クリープを入れないコーヒーみたいなもんやわ」と笑った私は、高須剛が詩をやめるときはこの世からおさらばするとき、と勝手に決めつけていた。彼を鼓舞するつもりでたった二人で始めたのが「現代詩を読む会」だった。近代詩から始まって現代までの詩人を改めて読み直すことは、痩せ細っていく現代詩を地方から再生させたいという思いがあったからだ。十数名のこの勉強会は『詩祭り』等の企画で、文学だけではなく音楽や絵画・写真とのコラボで詩の世界を拡げる試みを始め、やがて伝説的な季刊詩的文化雑誌「鴎」にたどり着くことになる。それは、その後の「湾」への渡船でもあった。年齢を重ねて更に輝きを見せていた高須剛の詩は、今読み返しても新しい。

児童文学が職業になってしまって以来、最近では忙しさにかまけてゆっくり詩の話なども出来なかったが、私にとって、後にも先にも詩の師と呼べるのは高須剛ひとりである。

「ようやく、開放されたか」

亡くなる少し前、病床での最後の言葉は私に宛てたものだったか、それとも。

⑨会員の情報・動静／刊行物・県内情報など（6月～12月）／会員の詩誌／県外詩人団体発行本・同会報

⑩〈訃報〉▽高須剛氏　8月21日逝去。「偲ぶ会」が、10月23日赤穂市「煉瓦屋」で、また11月21日に相生市「エミーホール」で催された。

⑧〈詩碑探訪⑲〉「友情の詩碑―鈴木漠詩碑」

梅村光明

二〇一〇年度の兵庫県文化賞を受賞された鈴木漠さんは、故郷である徳島でも徳島県文化賞を二〇〇二年に受賞されている。出身地と暮しの地の両県での文化賞受賞は、詩人としてはもとより、連句の伝道師としての功績が評価された結果であり、まさに両県を結ぶ文化の架け橋の役割を、長年に亘り果たされてきた証明でもあると言えよう。

兵庫県文化賞受賞者には、播磨中央公園に記念碑を建立する資格が与えられるそうだが、徳島県文化賞の受賞を称え記念する詩碑が、徳島では二〇〇四年に鈴木さんの出身地である三好市来祖谷の龍宮崖公園内に、鈴木さんが卒業した栃之瀬中学校の同窓生によって建てられている。

この秋、有名な祖谷のかづら橋から、さらに見事な紅葉に彩られた祖谷渓谷を、車で十五分ほど遡ったところにある、その龍宮崖公園を訪れた。

公園は祖谷渓谷の対岸にあり、スリル満点の金属製の吊橋を渡っていくしかなく、かづら橋よりも絶景が楽しめた。

御影石製の記念碑は、吊橋を渡りきった左側に渓谷に向って建てられ、碑面には投稿欄で北川冬彦選で特選となった、第一詩集『星と破船』の巻頭作品「岩」の第一行、「黝い苔を／身にまとって／岩は／しんとしていた」が刻まれている。

碑の裏面には「昭和二十六年度栃之瀬中学校卒業生一同」として、同窓生六十名全員の名前が記されてあり、同窓会での発案から始まった記念碑建立計画が、同窓生の総意として実現されたことがよく分かる。

建立から六年を経て、詩碑は刻印された詩行そのままとも言えるように、土台の石組みには苔が広がり、周りの自然に馴染み溶け込んでいた。そして、この絶好のロケーションを建立場所に選んだ同窓生たちの思いが、熱い友情の証しとして伝わってきた。

かつて塚本邦雄の『麒麟旗手』に、「鈴木漠と会った。作品は、あんな短歌つくる人が、と思ふ位いいのをかいているね。が、ひどく素朴だ。」と書かれた鈴木さんのバックグラウンドが、この友情の詩碑に込められていることを確信した。〈第28号〉

★第29号（2011年6月20日発行、8頁）

①〈報告〉第15回定期総会の報告／折しも巨大台風2号が西日本に接近中との報道がながれていて、総会の出席予定者の会場までの交通手段が懸念されていた。当日の午前中に激しい雨に見舞われるが、さいわいにして午後からの総会の開かれる時刻には雨が止んでいた。予定通り5月29日（日）、無事にラッセホールにて開催することが出来た。

▽総会に先立ち、4月23日午後一時より私学会館にて第29回常任理事・理事による合同理事会がもたれた。議題は、三宅武会長から去年の役員改選の選挙結果をふまえて新役員人事案をはじめ、玉井洋子事務局長から２０１０年度の事業報告、小西誠会計から会計報告がなされ、その後、新年度の事業案・予算案が審議された。出席者17名、委任状2名。

▽午後1時より5階「コスモスの間」にて、第15回定期総会開始。事務局より総数１８２名のうち、出席33名、委任状90名。つぎに役員改選の結果、選任の承認を得て次のように新役員が決定した。

会長　松尾茂夫
副会長　鈴木漠　たかとう匡子　時里二郎
事務局長　高谷和幸
会計　小西民子
常任理事　大西隆志　神田さよ　在間洋子　玉井洋子　三宅武
会計監査　小西誠　谷田寿郎
理事　尾崎美紀　岩崎風子　紫野京子　たかぎたかよし　高橋夏男　丸田礼子　中堂けいこ　渡辺信雄

詩の周縁をさまよって

時里二郎

★行分け詩から散文詩へ

処女詩集『伝説』は、習作時代の産物で、本当は上梓すべきではなかった。ただ、詩の発想の核に、「物語」と「歌」という実に古典的な要素への嗜好があること、更にそれらは既に素朴なかたちで作品には組み込めない時代に生きていることを確かめることができたのは収穫だった。

ふたつの要素を散文詩によって組み立てなおしたのが、第二詩集『胚種譚』（一九八三年 湯川書房）だった。この詩集によって、散文スタイルが、自分の書くべき詩の方法だという思いを強くした。言い換えれば、詩＝「行分け」という詩の世界の外側にでることができたということである。

「行分け」を疑うことは、この時代に詩を書く者が必ずとらなければならない手続きのはずである。なぜなら、「行分け」は、そもそも「歌」の要請から生まれたものだが、この「歌」の質が、例えば近代と現代ではまるきり違うからだ。近代と同様の歌い方では歌えないこの時代に、「行分け」で詩を書くためには、どうしてもその方法的意義を問わなければならない。ただ、ぼくは「行分け」を否定しているわけではない。「行分け」＝詩の定式によらないで、「物語」や「歌」の別の表出の仕方が見えてこないかということを考えたわけである。勿論、そこには、入澤康夫や岩成達也、また親しい高柳誠の影響があることは確かである。

散文詩を書き始めたのを機に、「ユリイカ」から、青木はるみ・諏訪優の選であった「現代詩手帖」に投稿先を変えた。それが思いがけない結果をもたらしたのだった。散文詩二作目になる「荒ぶるつわものに関する覚書」が、青木氏の高い評価を受けたのである。『荒ぶるつわものに関する覚書』にぐんぐんひきこまれている間、さしもの猛暑も忘れていた。タイトルこそ猛々しいけれど実にしっとりとした文体であり、しかも微塵もキザなところがない。覚書とありながら、これほどの底ふかい哀しみと寂寥を香りたかい姿にしてさしだす詩は、めったにあるものではない。」（一九八一年九月号）とはじまる選評は、二段組の上段すべてを費やすものだった。これには感激した。この調子で書き継いでいけばいいのだという思いを強くして、投稿を続けていった。

散文詩を書くようになって、ことばの持つ論理や生理やリズムによって詩を前に進めていくという手応えを覚え、それがとても心地よかった。ちなみに、お二人の選によるその年の「現代詩手帖賞」は、糸井茂莉さんとぎりぎりまで争ったが、受賞はならなかった。しかし、「現代詩手帖」への投稿によって、散文スタイルで詩を書いていくという手応えを掴むことができたのは大きな収穫であり、青木氏の毎回の選評には勇気づけられた。また、これらの投稿詩を中心に編んだ「胚種譚」が、伊勢田史郎、安水稔和、君本昌久の選考になる「ブルーメール賞」をいただいたことも大きな喜びだった。〈第27号〉

★『胚種譚』のころ

『胚種譚』（一九八三年）所収の作品を書いていたころ、後に強い影響を受けることになる人たちに次々に出会った。

まず、この詩集の函と本文にコラージュを使わせてもらった銅版画家の北川健次さん。駒井哲郎に銅版画を学び、旧い写真を使ったエッチング技術で、ランボーやカフカなど、文学的で詩的なテーマを扱った作品に特徴があった。彼の作品に強くひかれるものを感じてコレクションを始め、手紙を書いたところ、北川さんからはすぐに返事が返ってきて、手紙のやり取りが始まった。

それから、この詩集の版元である湯川書房の湯川成一さん。盟友の高柳誠が、第二詩集『卵宇宙・水晶宮・博物誌』を湯川書房で出した縁から交流が始まった。湯川さんには、書物としての詩集のかたちの大切さを教えられた。詩を本にするとき、判型に始まって、本文用紙、活字、ノンブルの位置、函などをきちんと考えること、そういう装丁の重要さを、湯川さんの本作りから教わった。『胚種譚』は、和綴じ本のような雰囲気の表紙と、北川氏のコラージュが嵌められた黄色の函との意表を突く組み合わせで、表紙はフランス装になっている。大きめのくっきりと浮き立つ活版印刷の活字が、目に吸い付くように見える。詩集というものが、単に詩の寄せ集めではなく、書物という容器と一体となって初めて詩そのものが息づくものであるということを実感した。そこから書物全体で、一つの宇宙を作り出すものが詩集に他ならないというぼくの詩集観が生まれた。

さらに、木口木版画の柄澤齊（からさわひとし）さん。高柳の敬愛する版画家だが、彼を通して面識を得て以来、いまなお強い影響を受けている。二〇〇六年には、五十代で神奈川県立近代美術館で初の回顧展を開くなど、高い評価を受けている美術家だが、一方で文学にも深い造詣があり、無類の読書家で、ミステリーまで書いてしまう（『ロンド』上・下巻・創元推理文庫）。おまけに短歌・俳句に堪能で、現代詩にも深い関心を持っていた。ぼくの作品にとっては、願ってもない読み手の一人で、彼の忌憚のない批評にどれだけ勇気づけられたことか知れない。ぼくの作品は、こうした柄澤氏をはじめとした少数の読み手のために書いているとすら言える。

高柳誠、北川健次、柄澤齊、そして湯川書房社主の湯川成一。このころ、こういうメンバーとの濃密なつき合いが始まり、やがてそれは、『容器』という途方もない年刊誌の刊行へと繋がっていく。版画の表現の力に深い魅力を感じていたふたりの詩人と、詩に対する思い入れの強い二人の版画家が、詩と版画の融合を目指す本作りにとりかかるわけだが、これはまた次回に。〈第28号〉

★「容器」のころ　その1

「容器」は、柄澤齊（木口木版画）、北川健次（銅版画）、高柳誠（詩）、それにぼくの四人が同人で、湯川書房が制作。創刊号は一九八四年。翌年第二号、第三号は一九八七年。三号で終わった年刊誌である。

四人はともに同世代であり、版画家のほうは、書物や文学に、詩人のほうは版画にそれぞれ強い共感を抱いていたから、四人で何かやろうという方向へはすぐに道筋がついた。ぼくたちの念頭にあったのは、駒井哲郎と安東次男の共作である『からんどりえ』『人それを呼んで反歌という』といった詩画集だった。

「容器」という名前はだれが付けたのだったかもう思い出せないが、詩と版画の「容れもの」というほどの意味だったと思う。「妖気」という語感もぼくなどはそこに感じていた。ともあれ、そうやって話はまとまって、あとは四人の夢のような構想に、「やりましょう」と言ってその制作を引き受けてくれる版元が必要だった。いや、実は話は逆で、湯川憲房の湯川成一という人がいたからこそ、四人で夢のような同人誌の構想が立てられたのだと思う。

その当時、高柳は名古屋、柄澤は茅ヶ崎、北川は横浜、ぼくは兵庫と、遠距離のつきあいだったが、頻繁に持ち回りで同人の自宅に集まって「容器」を煮詰めていった。そうやってできたプランを湯川さんと相談しながら、装幀をはじめ紙の選択やら何やらいっさいを手がけたのは、柄澤さんである。彼によれば、湯川さんは、制作費などについてはいっさい、注文をつけなかったという。

「現代詩手帖」一九八五年一月号の、「詩誌生放送」というコラムの初回に、ぼくは「容器」のことを書いている。「版画がただ詩の挿絵として、あるいは詩が版画の解読としてかかれるのではなく、詩と版画が一冊の書物の中でお互いに挑発しあい、せめぎあいながら、それぞれ自らの領域を広げていくこと、さらには詩と版画が書物という宇宙の中で交感しあうような作品空間をわたしたちは夢見ている」

いささか昂揚した口吻が鼻につくが、確かに「容器」については、それぞれかなりのエネルギーを費やして、自分の作品を練り上げていった。一冊二万三千円（一〇〇部限定）という価格が示すとおり、売れるものを作らねばならないというプレッシャーもあった。それに、「容器」は各号ごとにテーマを決め、それに基づいて一冊の書物をつくるというコンセプトで、作品ばかりでなく、造本、構成、活字、紙にいたるまで、テーマを具現するために吟味されている。与えられたテーマをどう作品化していくか、ほかの同人の批評にさらされ、しかも書物の完成度にかかわるのだから、力はおのずと入った。そして、「容器」の作品の作り方が、以後のぼくの作品制作の原型を形作っていくことになる。〈第29号〉

★「容器」のころ　その2

「容器」に発表した作品のすべては、第三詩集となる『採訪記』（一九八八年）に収めた。この詩集も『胚種譚』に続いて湯川書房から上梓した。縦19cm×横18cmのほぼ正方形の形状で、表紙は赤と黒の布が張り合わせてある。本文のタイトル、小見出し、ノンブルを臙脂色に印刷した二色刷活版印刷。少部数の特装本ではないのに、ここまで意匠を凝らして詩集を作ってくださった湯川さんの熱意には今なお敬意を表してやまない。

「容器」の活動を通して、《詩》を書くというより、《作品》を書くということを強く意識するようになった。《詩》というジャンルがまずあるのではなく、それ以前に《ことば》の磁場をあやつることへの関心を強めていった。《行分け》の詩から遠ざかったのは、《胚種譚》からだが、その時は、《散文詩》を書くという意識があからさまに働いていた。『採訪記』では、さらにそこからの離陸を考えていた。『胚種譚』から始めた《譚》という容器は、いわゆる《詩》というかたちを遠ざけることになった。《詩》のかたちを詮索する以前に、《ことば》という素材そのものの《不思議》と《力》とに魅せられた時代だった。

そのような考えに導いていったのは、やはり「容器」の版画家たちからの影響だと思う。木口木版や銅版画は、版を彫り、それを反転させることによって作品が成る。つまり、彼らのイメージは、陰と陽、凸と凹、左右上下、ことごとくが、反世界なのである。その反（版）世界の設計図を描くことが、彼らの仕事である。それは、通常の世界では見えないものを見ることであり、忘れられたものを見つけることであり、隠された秘密を見出すことであり、世界のこれからの行方を見つめることでもある。その設計図が彫り込まれた版＝反世界が、紙面に転写される時、世界は確かに相貌を新たにしてそこに透視されている。

詩の場合も、そのような反世界のポエジーを求めなければならないのではないか。なぜなら、詩のことばは、日常生活の道具でもあるからだ。日常の次元と時間にあることばを、無反省に詩作品として投げ出すことはできないはずだ。《作品》としての構築物へと転位させるためには、どうしても、ことばをいったん反世界に引き込んで、反転のテクノロジーにゆだねなければならないのだ。

もう一つ、柄譚、北川ともに、この「容器」の活動を通して、版画というジャンルからかろやかに越境していったことにもぼくは強い影響を受けた。彼らはともにボックス・アート、もしくはリーヴル・オブジェといった立体作品を精力的に制作していったのである。版画というジャンルにこだわらず、彼らの創造的営為が最も激しくスパークする素材や空間や時間を求めようとする姿勢に、ぼくは心強いメッセージを読み取ったのだった。やがて、それが、詩の周縁への意識的なアプローチとなっていく。〈第30号〉

▽会報は6月と、12月の2回の発行。▽「詩のフェスタひょうご」は11月23日（祝日）場所は県民会館11Fパルテホール。作品締切9月20日。記念講演の講師は未定。▽企画展については鈴木漠副会長から、当初の目的を果たしたので詩画展を中心に会場を神戸文学館にしてはどうかと案が出され、また高橋夏男理事から「詩の現在展」を継続するかどうかの発議がありました。常任理事会にて継続審議となる。▽アンソロジー「ひょうご現代詩２０１１」は今年が発行年にあたり、担当理事から会員全員の参加を呼び掛けるとともに、来年からは補助金の増額が見込まれるので毎年の刊行にしてはどうかと意見が述べられた。

▽続く総会第二部では「東北大震災被災地にエールをおくろう」という趣旨のもとで朗読者18人による朗読のつどいがもたれた。神戸はかつての大震災の地でもあり、他の地方に比べて関心の高さがうかがえ、被災を自分のことばに置き換える詩が多く見られた。

▽続いて地下1Fのバイオレット間で懇親会がもたれた。22名の参加。大賀二郎氏が「それは一切を拒否した」と題して、被災地の福島を訪問した時の体験談があった。▽三月の詩画展会場にて東日本義援金を募集したところ、3万円と寄付金2万円がよせられ、合計5万円を東日本大震災兵庫県義援金募集委員会郵便口座00910-3-322340に振込みました。（事務局　高谷和幸記）

②〈エッセイ〉「どこにもない国をさがして―ことばの種を播くエディス・セーデルグラン」　寺田操

この世に起こるあらゆる出来事は、一瞬のうちに詩のことばを凌駕しかつ超えていくことがある。比喩や形容を許さない苛烈なリアル、シュールレアリスムも仰天するような光景が放映されて目の前に広がるとき、呆然とし声を失ってしまう。言語の純粋性を追求する非現実の世界が、一瞬にしてリアルに転じる。つまり狠実の世界として顕れるといった風に。

東日本大震災のさなか、三瓶恵子『どこにもない国　フィンランドの詩人　エディス・セーデルグラン（1892-1923）』（冨山房）を手にした。100年の時空を超えてやってきたのは、見知らぬ国の見知らぬ詩人。フィンランドの女性詩人エディス・セーデルグラン（1892～1923）といっても、わが国では知られた詩人ではない。フィンランドとスウェーデン両国ではエディス・セーデルグラン協会があり、セミナーなども開催される、国民的人気の詩人である。

《見たことのない魚が深みをゆっくりと移っていく／見知らぬ花が海岸で輝いている／私は赤　黄色　そしてすべての他の色を目にした／けれど一番危険なのはこの美しい　美しい海／この海は人に渇きを与え　来るべき冒険に目覚めさせる／物語の中で起こったことが　私にも起きるのだ！》（三瓶恵子訳「不思議な海」『詩集』1916）

エディスは、ロシアのサンクト・ペテルベルグに生まれ、コレラが蔓延したためフィンランドのライヴォラ（現・ロシアのカレリア）へ。処女詩集が出版されたのは、1917年のロシア革命前年だった。世界はすでに口語自由詩の時代に入り、言語の実験が行われていたが、伝統的な韻を踏まない彼女の作風は受け入れられる土壌が出来ていなかった。ロシアは領土が広い。中央と地方都市とは文学思潮の事情も異なっていたのだろう。文語定型詩が根強い文学事情にあった。ニーチェやシュタイナーを愛読し、神秘的で思索に満ちた一篇の詩が生まれる。その詩が新しきスタイルを持って不意に登場してきたとき、詩は書き手の予想を超えて、思わぬ混乱と抵抗にあうものだ。

《月は知っている……血が夜にここで注がれることを／湖の上に架けられた銅の道に一つの英知が進んでくる／死体は美しい岸ハンノキの間に横たえられると／月はその一番綺麗な光をそのたぐいまれな岸に投げかける／風は起床の角笛の如く松の間を走る／この孤独の岸で何と地上は美しいことか》（『月の秘密』『九月の竪琴』1918）

エディスの住むバルト海に面した北欧のフィンランドは、12世紀からはスウェーデン領、1809年からはロシアに割譲、ロシア革命を経て1917年独立、内戦。実に複雑な歴史を持つ国である。エディスが通っていたロシアのドイツ教会が運営する女学校には、さまざまな国の女の子たちが通い、多言語・多宗教という特殊な環境にあった。そのため彼女自身も習作時代には、90％がドイツ語、残りはスウェーデン語、フランス語、ロシア語で詩が書かれた。フィンランド語を話さない母との暮らしのなかで、フィンランド人なのに「母語」はスウェーデン語という事情。フィンランド語は独習するしかなかったエディスである。そうであるがゆえに、思いを伝える微妙な表現が可能でなく、詩作はある時期からスウェーデン語に切り替えられた。当たり前のように母語で詩を書く私たちには想像を絶する多言語環境にあったエディスである。おまけに、多感な少女期に発症した父親と同じ結核に苦しみ、サナトリウムと自宅とに限定された生活。ロシア革命の戦禍を挟んだ彼女の31年の短い生涯は、物語のなかの出来事のように映る。

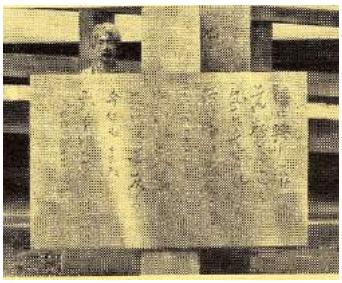
《私はどこにもない国に憧れる／なぜなら　存在するすべてのもの》（『遺稿集』1925）

内戦で戦場となったライヴォラは焼きつくされ「どこにもない国」になってしまった。失意のなかでエディスに出来る冒険は詩作だけだった。

もしかして「どこにもない国をさがす」ことが、詩人という種の宿命ではないのだろうかと考えさせられることがある。どこにもない場所、どこにもない国、言語でしか構築できない世界に、ことばの種を播こうとすることなのでは…と。

③〈エッセイ〉「昔話」清水翠
④〈エッセイ〉「こころの歌は」三宅武
⑤〈エッセイ〉「麦藁帽子」今村欣史
⑥〈エッセイ〉「この春」佐土原夏江
⑦〈エッセイ〉「鳥の歌」梓野陽子
⑧〈エッセイ〉「チャイナ・シンドローム」の悪夢―東電福島原発事故に思う―」小西誠
⑨〈詩論〉「詩の周縁をさまよって　その4―詩の周縁をさまよって」時里二郎（別枠に表示）
⑩〈詩碑探訪19〉「大塚徹碑　北海の蟹」石山淳（別枠に表示）
⑪会員の情報・動静／刊行物・県内情報など（6月～12月）／会員の詩誌／県外詩人団体発行本・同会報
⑫〈訃報〉▽高須剛氏　8月21日逝去。「偲ぶ会」が、10月23日赤穂市「煉瓦屋」で、また11月21日に相生市「エミーホール」で催された。

⑩〈詩碑探訪⑲〉「大塚徹碑　北海の蟹」　石山淳



大塚徹詩碑「北海の蟹」
播磨國総社境内（姫路市）

昭和初年から五十年代にかけて活躍した姫路の詩人、大塚徹（一九〇八－一九七六）の詩碑が、播磨国総社にある。正社名「神社」。詩碑は、境内、本殿右に位置し、鳳真治・設計、尾上明治・彫刻、藤原露眠・筆によるもの。詩人の胸像とともに、樟の大樹の許にある。

陽に興じては
花粉のごとく
風にながれ
黄昏に驚きては
鳥のごとく
巣にかえる
あはれ　友よ
今日も　また
旅をゆくか

昭和四年、二十一歳の時、全国詩誌「愛誦」（交蘭社、浜名東一郎発行）に投稿をはじめ、六月号に西条八十選で特選となった詩である。『大塚徹・あき詩集』（培養社、一九七七年）の年譜によると〈昭和三十八年（一九六三年）一月二十日、鳳、富岡実、内海都子夫たちの二年越しの計画がみのり、総社境内に「北海の蟹」（第一節）の詩碑建立、除幕式が行われる。（略）市会議員尾上宇一、森山忠子が建立運動に奔走した。〉とある。

この詩は、大塚徹の出世作で、詩の虜となった記念すべきもの。詩のほかに、民謡、歌謡、国民歌、校歌などを多数残している。その一つに、昭和二十八年に神戸新聞の依頼により、総社二十一年目の三ツ山祭協賛の「三ツ山音頭」を作詞し、小唄勝太郎が唄ってテイチクーレコードから発売されたものがある。「総社さん」との縁がうかがえる。

この詩碑を介して思うのは、「神戸詩人事件」や「太平洋戦争」のあった昭和という時代と、大塚徹の周辺にいて、この時代を生きぬいた小林武雄、竹内武男、植原繁市、八木好美、詩村映二、鳳真治、沖塩徹也らの先達詩人のことである。〈第20号〉

★第30号（2011年12月19日発行、8頁）

①〈予告〉「ポエム&アートコレクション2012―併催　ひょうご・詩の現在展／2012年3月9日～20日▽鼎談　3月10日（土）「誰もいない風景にむかう」―震災をめぐる詩とアート▽シンポジュウム　3月17日（土）「被災地から考える東日本代震災」

②〈報告〉「詩のフェスタひょうご2011」は、2011年11月20日午後1時15分より兵庫県民会館11階パルテホールで行われた。

▽開会の挨拶が松尾茂夫会長から述べられた。今年で詩のフェスタは12年目を迎える、毎年七百から八百の作品が応募されている、これまでに約一万編位の作品が寄せられたことになる。

▽続けて、たかとう匡子副会長による「一〇〇年読み継がれてきた童謡詩」と題しての講演。詩の言葉は向こうからやってくる、日常のなかのちょっとしたことから詩の言葉はやってくる。西条八十作詩の「かなりや」は作者が詩が書けなくなった時のことを書いている。また、野口雨情作詩「しゃぼん玉」についてはこの時代の間引きの習慣を悲しんで歌ったものではないかとの解釈を述べた。「七つの子」同じく野口雨情作詩については、七歳の子という論と、七羽のガラスという論とがある。これらの童謡は大正14年NHKラジオで全国に流れるようになった。歌い継がれてきた童謡という接点で、世代間の垣根を取り払った共通の話題は、花咲くことと思う。と締め括られた。

▽続いて、時里二郎副会長から選考経過報告が述べられた。一般の部の応募者177名、高校の部49名、これを8名で選考した。この時期、応募された詩が震災のことを書かれたものでない作品でも震災のことを通して読んでしまうと述べられた。ジュニアの部応募者小学生169名、中学生141編、これを7名で選考した。詳しくは、入選作品集に書かれている。その後、表彰式と、高校生、中学生、小学生の詩の朗読があり、記念撮影後終了。入賞入選者の出席者は24名。会場を地下食堂へ移し、4時から懇親会を行った。入賞された石倉宙矢氏、滝野澤弘氏も参加され、受賞作品を朗読。和やかな時間をもつことができた。懇親会出席者は理事を除いた会員は数名であった。

（文責　神田さよ）

③〈回想〉「芦屋、明石、そして―兵庫県現代詩協会のことなど」安水稔和（別枠に表示）

④〈エッセイ〉「インド洋がやってきた」大賀二郎

⑤〈エッセイ〉「若い書き手へつなぐ」渡辺信雄

⑥〈書評〉「この秋収穫の会員の詩集から」たかとう匡子／▽植村孝『長い旅の果ての回想』▽石山淳『異端のレクイエム』▽寺岡良信『凱歌』▽杉山平一『希望』

⑦〈評論〉「詩と批評『第三紀層』の終刊に触れて」谷田寿郎

七十七号でピリオドを打ちましたが、その足どりについては、創刊からの同人、三宅武の編集後記や、三十八年間に及ぶ同人の消長を伝える同人一覧で、お判り頂けるかと思います。政治の季節といわれた六〇年安保闘争から十三年後の一九七三年に発刊。当時の宰相は田中角栄。拙誌『第三紀層』の誌名の由来は、日本列島の形成が、第三紀に生じた地層によるものに因んでいます。角栄は列島改造論をぶちあげ、結果的には国土の大部分を占めていた第三紀の地層を掘り崩し、自然を破壊。拙誌が、そうした現実と向き合ってきたのも、むべなるかな―。詩作品のみでなく批評活動にもウェイトを置いてきたのも、そんな時代に敏感に反応した結果であるといえそうです。

その間、編集者も赤松徳治、三宅武、たかとう匡子、そして小生へと受けつがれてきました。その間、四名の同人の追悼号を出す。これも拙誌の特異性かもしれません。

終刊号で太田良一が、エッセイ「さらば友よ」で語っているように。「これからは下手な追悼文を書かなくて済む、という安堵感と引き換えに、私の死も仲間から追悼文をいただかない、という代償がある。それもなぜか淋しい。」と胸中を吐露しているが、小生もそれで良いのだといえない複雑な心境です。

同じ終刊号で、中島妙子が詩「愛しいものたちへ」という作品を発表、その最後の六行。

即刻（すぐ）にとどく電子機器でではなく
ひともじひともじ手で書いて
ゆっくりゆっくり届くように投函します
あなたたちのどこかにわたしの体温が

③〈回想〉「芦屋、明石、そして
―兵庫県現代詩協会のことなど」

安水稔和

兵庫県現代詩協会は阪神淡路大震災から生まれた、と言っても過言ではないだろう。

それまでにも何度か兵庫県内の詩人たちの会を作ることが話し合われたことがあったが、いずれの時も実現しなかった。ところが、一九九五年一月十七日の大震災後に話し合いが持たれ、不思議と言っていいほどにスムーズに事は運び、実現することになった。

大震災から二年後の一九九七年十一月二十三日に、芦屋市の市民センターで設立総会が開催された。町が崩れ、芦屋川河岸の石垣が崩れ、まだまだ震災の傷跡が残り、記憶が消えることなく満ち溢れる街、芦屋で。

その日に定められた会則の第一章第一条には、当会は兵庫県の詩人たちの親睦交流を図り、現代詩の普及発展のための相互協力や情報活動を円滑に行うためにとある。それは、他者と結ばれあうことを、隣と繋がることを願う心に外ならない。ゆるやかに、ゆっくりと、しかししっかりと。挨拶で私はそのように述べた。

芦屋での設立総会に続いて、兵詩協の第一回目の講演と朗読の集いが開催された。〈明日への架橋〉と題して、明石市のサンピア明石のフロイデホールで。

阪神淡路大震災の被害は芦屋・西宮・宝塚など阪神間や神戸、それに震源地の淡路にとどまらない。明石もまた被災地であった。町も商店街も学校も公園もタメ池も、道路も鉄道も港湾も。天文科学館の塔内部が全壊、明石公園の石垣が崩壊。だから、明石の人たちがこの震災を阪神明淡大震災と呼べと言っている、と聞いた。芦屋での設立総会の次はどこで開催しようかと話し合うなかで、では今度は西の明石はどうだろうということになり、明石に決まった。

当日。講演は多田智満子さんと金田弘さん。詩の朗読は〈三年目の震災詩〉と題して会員十四人が自作詩朗読。〈明日への架橋〉といい、〈三年目の震災詩〉といい、1・17が私たちから遠のくことはなかった。

ところで、橋と言えば明石では明石海峡大橋。当初は全長三九一〇メートルのはずだった。ところが完成直前の阪神淡路大震災で、淡路側の主塔が西に一・三メートル、岸のアンカレイジが同じく西に一・四メートルずれた。そこで一メートル伸ばして、大橋は全長三九一一メートルになったという。私たちの心も、私たちの言葉も、震災前と後とでは同じではないはずだ。橋と同様に震災によって動いた。動かなければおかしいのだ。

〈明日への架橋〉開催の二ヵ月後、明石公園に震災碑が建立され除幕式が行われた。青御影石の碑面には私の詩「これは」が刻まれた。

これはいつかあったこと。
これはいつかあること。
だからよく記憶すること。
だから繰り返し記憶すること。
このさき
わたしたちが生きのびるために。

今までも、今も、これから先も、私たちはこの時間と空間に生きてきたし、生きているし、生きていく。だからこそ、このさき私たちが生きのびるために。

今年二〇一一年三月十一日、東日本大震災。十六年前の阪神淡路大震災を上回る二倍三倍の、いや二乗三乗の言語を絶する災害である。苦しくてつらい年だった。

間もなく、1・17から十七年目が、3・11から一年目がやってくる。

わたしたち
揺れて震えて
それでも
それだから
いのちあれ
ひかりあれ

今は祈るのみ。繰り返し繰り返した言葉をまたそっと呟く。

〈第30号〉

とんぼや蝶やてんとう虫になって
ひょいとでも止まればいいのですが……

そんなささやかな願いを胸に秘めて、今後とも現代詩協会の一員として、地道に書き続けたいと思います。―「一葉翻空天下秋」、漢詩の一句が、小生の脳裏に蘇ってきました。

（２０１１・１０・吉日）

⑧〈詩誌紹介〉「『Contralto』」坂東里美

「Contralto」は二〇〇二年十二月に第一号を発行。詩とエッセー、詩の評論、翻訳詩など、Ａ４二枚を三つ折りにした手作りリーフレットだが、内容は濃いと自負している。メンバーは私と関はるみの二人。そして毎号、新鮮な感覚のゲストを一人お願いしている。締め切り間際の胃がキリキリする緊張感は九年経った今も変わらない。

二〇〇二年九月に第一詩集を詩人藤富保男氏のあざみ書房から出版し、出来上がって初めて氏にお会いしたとき「詩集ができてほっとしていると思うが、これからもどんどん汲み出さないと詩の泉はすぐに枯れてしまう。簡単な詩の冊子でも定期的に出して次々と詩を書かなければいけない」というようなことをおっしゃった。二〇〇二年十月世田谷文学館での「西脇順三郎没後二〇年展」帰り道の喫茶店での話である。帰宅してからすぐ詩友の関はるみに声をかけて十二月には第一号を出した。詩の泉を枯らすわけにはいかない。

「Contralto」という名は関はるみが『ドリトル先生』の中から「珍しい種類の雌の緑のカナリアが、メゾ・コントラルト（女性の低音）でうたう」からつけてくれた。緑のカナリアとして、一号から従来の詩には囚われず自由に書いてきた。詩の泉を汲み出す傍ら、左川ちかをはじめとする女性モダニストを紹介したエッセーは「詩学」に連載する経験も得て、詩の評論という泉を掘ることにつながった。また表紙のイラストは、視覚詩の泉を掘ることにつながり、表紙の原画は今年もパリでの「ヴィジュアルポエジィ・ジャパン展」に出展して好評を得た。最近は日本では未知の海外の女性詩人の詩の翻訳をはじめ、さらに新しい泉の穴を掘り始めたところである。

関はるみの「切手」の絵からヒントを得た詩と散文の間にある作品は反響が多く、新しい詩の可能性をさらに探っている。こんな簡素なリーフレットでも丁寧に目を通してくださる先輩詩人もおられてありがたく頭が下がる思いだ。緑のカナリアとして同人誌の中では異端である「Contralto」が、大らかで革新的な兵庫の詩的風土の中で自由にやらせていただいていることに感謝している。

⑨〈新入会員〉▽北川清仁▽大橋愛由等▽福本信子

⑩〈訃報〉西村昭太郎氏・９月逝去

⑪会員の情報・動静／刊行物・県内情報など（６月～12月）／会員の詩誌／県外詩人団体発行本・同会報

★第31号（２０１２年６月30日発行、８頁）

①〈報告〉第16回定期総会が６月３日午後一時半から西宮市民会館で定期総会が開かれた。会員数１７１名、出席者41名、委任状82名、合計１２３名で規約により総会が成立した。松尾茂夫会長から挨拶があり、会場から江口節が議事長に選出された。事業報告・会計報告と本年度の事業案・会計案が総会で承認を受けた。

▽「詩のフェスタひょうご」は午前にジュニア部門の受賞式・朗読会を行い、午後からの一般の部を取りやめ、小池昌代氏による講演、現代詩朗読大会、詩を語る夕べを新しく企画する。

▽ポエム＆アート展は１月11日から22日、神戸文学館。詩画展・詩の現在展・シンポジュウム・詩と音楽のコラボを企画する。

▽アンソロジーの発行について、アンケートの結果により隔年に発行することになったが、同時にアンソロジーの見直しを行いながら、編集委員を５名選出して企画案をつくることになった。

▽「（仮称）文学紀行」と名付け、他県との交流会を２月から３月（未定）に計画しており、文学館・記念館・美術館など詳しい会員はぜひ実行委員に入っていただき楽しい交流会を一緒に作り上げたい。

▽二部で時里二郎氏が「詩が書けなくなって」という演目で講演会がもたれた。言葉と詩の関係、そして谷川俊太郎、平出隆、入沢康夫などの散文スタイルの詩に触れながら講演が進められた。時里詩の詩論ともいうべき、詩から遠ざかる方法で詩に接近を試みる話は多くの関心を呼んだ。

▽三部では、司会・進行を寺岡良信がつとめ、芦田はるみ、入江田吉仁、香山雅代、とべたみ、中川道子、中堂けいこ、永井ますみ、丸田礼子、宮川守、由良佐知子の10名のアンソロジー出版記念朗読会を持った。時間が超過したので、その後27名が参加した「四つ葉庵」の親睦会で引き続き朗読会を行った。

（報告者・高谷和幸）

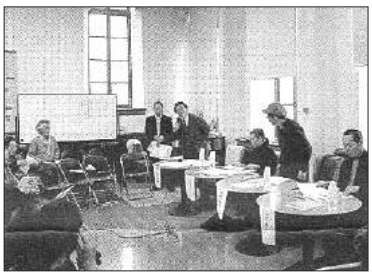
②〈報告〉「第一回ポエム＆アートコレクション」玉井洋子（別枠で表示）

③〈詩史〉「七月の情熱」高橋夏男（別枠で表示）

④〈書評〉「冬と春収穫の会員の詩集から」たかとう匡子／▽にしもとめぐみ『マリオネットのように雨は』▽大橋愛由等『明るい迷宮』▽岩崎風子『玻璃と

②〈報告〉「第１回　ポエム＆アートコレクション」

玉井洋子



毎年の恒例行事となっていた３月の企画展が、好評のうちに昨年（2011年）の「詩誌『『蜘蛛』の仲間たち展」を最後に終了。併催されていた詩圓展を残し、この度、意匠もあらたに「ポエム＆アートコレクション」として再起動。第一回展には29名、38点の応募があった。

☆出品者　岩崎風子　大賀二郎　大西隆志　大橋愛由等　神田さよ　香山雅代　和比古　小酉誠　鈴木漠　高橋冨美子　谷田寿郎　谷部良一　高谷和幸　玉井洋子　とべたみ　永井ますみ　中島友子　福永祥子　中堂けいこ　福本信子　福井久子　水こし町子　牧田榮子　松下玲子　三浦照子　西海ゆう子　丸田礼子　山本真弓　由良佐知子

神戸文学館の常設展の場所を少しゆずってもらっての展示。展覧会をメインに今後を考えるなら、ちょっと手狭。館長、学芸員さんはやさしいし、イベントには格好の場所。だが、もとチャペル。声がハウリングして聞き取りにくいのが難点。

2012年３月９日～20日の開催期間中、各土曜日ごとに鼎談「誰もいない風景に向かう」とシンポジウム「被災地から考える東日本大震災」を開催。東北の大震災から一年目とあって、メディアも関心をよせ、ＮＨＫの夕方のイベントガイドや情報誌などにも多数紹介された。

最終日には作品を引き取りにきた人たちを巻きこんで、予告なしのゲリラライブ。出版されたばかりのアンソロジー『ひょうご現代詩集2011』をもちこんでの詩の朗読会。底冷えのする寒さの中でここだけひとあし早く春がきていた。

レンガづくりのとんがり屋根が瀟洒なたたずまいをみせる神戸文学館は、明治37年に関西学院のチャペルとして建設されたものを原状に復元したといわれる。この場所は、まだここが王子市民ギャラリーと呼ばれていた2001年、兵庫県現代詩協会が手がける企画展、第一弾「竹中郁と兵庫の詩人たち展」が開催された場所でもある。それから実に11年の歳月をかけて、表舞台に登場した著名な詩人ばかりではなく、ひょうごの詩史からはずせない詩誌や詩人たちをほり起こし、過去を知らない私たちにルーツをひらいてみせてくれた。困難な資料収集と、検証には歴代の会長、副会長をはじめ理事さん方の献身があった。

同時開催の詩の現在展「今、ことばの森はざわめいて」には、会員関連の詩誌など38点、全国からよせられた年刊や会報23点がテーブルいっぱいに展示された。

〈第31号〉

なって』▽伊勢田史郎『海のうえの虹』
⑤〈詩史〉「『神戸詩人事件』関係一次資料」季村敏夫（別枠で表示）
⑥〈詩論〉「詩の周縁をさまよって　その6～散文スタイルの作品をめぐって～」時里二郎
⑦〈詩史〉「『柵』通巻300号の軌跡」志賀英夫

月刊詩誌「柵」が通巻300号を昨年の十二月に達成した。300号の起点は昭和61年12月10日で、第一号はワープロで仕上げたが。どこの書店もワープロの本は置いてもらえず、当時開発されたDLQを手に入れた。

「柵」の当初の仲間は、戦前の「若草」で知り合った先輩たちが中心で、創刊当時の頁数は四十頁、順次増頁し、一年後には百頁にした。

阪神・淡路大震災は、一〇〇号を編集している時です。アート・エイド神戸を立ち上げられた伊勢田史郎さんから、「震災詩集」の刊行の電話で逸早く参加して、四月に初版を発行、好評で三版を重ねた。翌年は第二集。三年目に「復興の譜」の副題で第三集の刊行です。

忘れてならない事柄に被災された芦屋の吉沢独陽さんのご家族から、蔵書を軽トラ一杯、頂きました。この蔵書の中に戦前の詩誌が多数あり、これを活用して『戦前の詩誌・半世紀の年譜』を作成するのに「柵」116～135号誌上で一般のかたに協力を要請して、集まった詩誌や文学館の蔵書を探り出して約千五百点を収録して、十年前の一月に一冊にまとめて刊行した。

これが『戦後詩誌の系譜』の刊行に繋がります。

「柵」誌上では201号～249号まで連載し、約三千点を収録した。
⑧〈詩誌〉「個人誌について」かただ ときこ
⑨〈追悼〉「和田英子さんの逝去を悼む」松尾茂夫

今年三月、詩人の和田英子さんが亡くなられた。享年八十六歳、地味で人前で目立とうとはしない人だったが、根気よく詩誌発行や詩作に専念されていた。

伊勢田史郎氏らの発案で神戸周辺の詩作者たちの合評用冊子「現代詩神戸」の発行実務を四十年余りも季刊を維持しつづけ、追悼号の次号は二四〇号である。

第三詩集『点景』で小熊秀雄賞を受賞、また地域での評価も高く、神戸市文化賞や兵庫県文化賞も受けている。

大正十五年生まれなので、敗戦時には数え年二十歳、疎開のため高等女学校も中退のかたちになり、暗い青春期だったと想像される。

一昨年暮れから体調を崩されていたようで、「現代詩神戸」発行業務や会計を戦後世代に引き継ぎ、微塵の隙もない生涯を全うされた。
⑩〈追悼〉「杉山平一さんの逝去を悼んで」福井久子

5月19日、杉山さんが肺炎で亡くなられた。4月25日発行の「日本現代詩会報」で、今年の第30回現代詩人賞を杉山さんが受賞され、6月2日開催の「日本の詩祭2012」で贈賞されることを読んだばかりであり、しかも御自身が東京まで受賞式に出かけられるとあった後だったから驚きました。

昭和18年に処女詩集『夜学生』出版、27年『ミラボー橋』、42年に『声を限りに』、52年に『ぜびろす』、62年『木の聞かくれ』が出版され、平成9年『杉山平一全詩集』（上・下巻）、16年「青をめざして』、次に『巡航船』、18年『現代詩文庫1048』、昨年11月に『希望』の一刷が、二刷が12月に発行され、杉山さんの御活躍ぶりが私たちの前に示されていたので、それから半年後に幽明境を異にされるとは、心の底に石を投げこまれた思いです。詩集「希望」最後の詩「犬の声」にはいわゆる「四季派抒情」に入りきらない生の根底にある恐ろしさが覗いています。即ち、「いまや遠ざかりつゝある／生きものたちの声」です。現代詩人賞受賞に際しての言葉の中に「私の詩はヒューマニズムが基本にあり……」とあって、まさにその通りだと思いますが、先に述べた『犬の声』にみられるして広く認められる存在だった。たとえば木山捷平は、彼の詩「七月の情熱」と同名の小説に、黄瀛の美しい妹の黄寧馨に想いを寄せる話を書いている。貧と放浪のデカダン暮らしの木山と、良家の躾と教養を身につけた黄瀛とは不思議にウマが合った。士官学校の寄宿舎から誘い出しては、夜の巷を引っ張りまわしたようである。

その黄瀛は、詩碑が銚子にできて、二〇〇〇年（平成12）夏に来日、九十三歳だった。そのことを後に知ったぼくは、いわば幻の詩人だった原理充雄のことなど、思い出を語ってもらうべく手紙を出した。高齢なので案じていたが、さいわい四川外語学院教授などの肩書きのある名刺と近影を添えた丁重な返書が届いた。坂本遼や原理充雄に会ったという証言があり、原理の竹内勝太郎宛の書簡に大阪の彼を草野と黄瀛が一緒に訪ねてきたとあるのと一致、念願を果たした喜びを感じたのだった。

みずからの混血・アヒノコの悲哀に傷みながら、日本への親愛をもちつづけた彼にとって、神戸を歌った「七月の情熱」一篇は、その青春の自画像でもある。

二〇〇五年（平成17）七月三〇日、いささかの栄光と多くの苦難に満ちた生涯を終えた。九十八歳である。

草野心平が神戸港を出るときに聞いた銅鑼の音が、詩誌「銅鑼」となり、そのネットワークに連なる若い詩人たちが、神戸の現代詩の幕を切って落としたと言ってみたい気持ちを、ぼくは持ちつづけてきた。

〈第31号〉

③〈詩史〉「七月の情熱」

高橋夏男

神戸港メリケン波止場を、銅鑼の音とともに日本郵船八幡丸は上海に向けて出航した。一九二一年（大正10）一月、乗っていた草野心平は十八歳、まだ詩を志す意思も定かでなく、青春彷徨のカオスの中にいた。目指すは広東省広州の嶺南大学だ。

この年には、佐藤春夫『殉情詩集』や平戸廉吉「日本未来派宣言」が出たりして、詩壇も近代から現代への大きなうねりの中にあり、大学がアメリカ系のミッションスクールだったから、リンゼイ、カミングズ、マスターズなどのアメリカ詩に親しみ、とりわけサンドバアグに惹かれて『シカゴ詩集』『煙と鋼鉄』を翻訳したりして、草野は詩への接近を強める。

一九二三年（大正12）七月、暑中休暇と徴兵検査で帰国した草野は、亡兄・民平の遺稿詩集『廃園の喇叭』を出版し、猪狩満直たち郷里福島県磐城のグループに加わって詩人としての道を選ぶことになる。九月はじめ、広州に向かう途次（その船上で関東大震災の報に接する）、京都で竹内勝太郎や関西学院の教授・学生たちの詩誌「想苑」を知るが、猪狩満直たちと竹内勝太郎は、その後の彼の詩的出発に当たり大事な存在になっていく。

竹内と会ったり、中国へ往来する大阪（こうがい）・神戸（ごうど）では、自分の出す詩誌の有力な同人になる黄瀛（こうえい）、原理充雄（げんりみちお）、坂本遼らと巡り会わせてくれることになる。すなわち、詩人への登竜門とされていた詩誌「日本詩人」（新潮社）に入選したばかりの新進の彼らを仲間に迎えて、草野は詩誌「銅鑼」（一九二五年）の創刊に至るのである。

原理充雄は、後に左傾して草野と袂を分かち思想運動に急進、治安維持法で獄死し、草野に追悼詩「原理死す」を書かせることになる。しかし、関西学院で竹中郁と同級だった坂本遼の詩集『たんぽぽ』（一九二七年）の序文を草野、跋文を原理が書いて、神戸に現代詩のユニークな記念碑を建てたのであった。

その坂本と草野の出会いは、一九二五年六月。帰国して神戸に上陸し、元町辺りの宿屋にいた彼を、学生服の坂本が訪ねてきたのだった。また、「銅鑼」を出していた前後、たびたび神戸に来遊し、坂本や後輩の学生たちの下宿の食客・居候を決め込んで逗留、関学などの多くの詩人たちに刺激を与えた。姫路砲兵隊に入営した坂本との面会に、仲間たち大勢で出かけたりもしている。

ところで、中国人の父と日本人の母を持つ留学生の黄瀛にも、神戸はゆかりの深い往還の門戸だった。彼には、馴染みやすい国際都市の街角に心安らぎ、混血の身の自分と妹への思いをこめて情感に浸った作品がある。

〈七月の情熱〉――白いパラソルのかげから／
私は美しい神戸のアヒノコを見た／すっきりした姿で／何だか露にぬれた百合の花のように／涙ぐましい処女を見た／父が――／母が――／その中に生れた美しいアヒノコの娘／そのアヒノコの美しさがかなしかった／／あゝ、私はコールテンのヅボンをならし乍ら／その美しい楚々たる姿に／パナマハットの風を追はうとした／彼女の白いパラソルの影で／その美しい眼と唇に／聖い接吻を与えようと／ふと途上のプラタナスの下で／七月の情熱を高めてしまつた

父は四川省重慶の師範学校長、母も中国の女子教育に尽くした人だった。父を早く失い、妹とともに母の郷里の千葉県に帰って日本の教育を受けるが、事情が生じて再び天津に移り、青島日本中学校に編入する。そんな挫折と変転の中で詩を書きはじめ、やがて早熟な詩才が草野心平との邂逅で花開くことになる。

実生活面での黄瀛は、父と母との二つの祖国の風雲と動乱をくぐって数奇かつ波瀾の運命をたどる。日本の陸軍士官学校を出たエリート軍人として、まず蒋介石の下で母の祖国日本と戦った。つづく内戦のあと成立した中華人民共和国で、国民党軍の高級将校（少将）として捕虜にされ、裁判により重労働が課せられて入獄（一九四九年）、一九六二年に出獄したが、一九六六年文化大革命に際して日本との関係が追求され、再び十一年半の獄中生活を余儀なくされた。言語に絶する生涯である。

しかし。詩人でもありつづけた彼が、南京で敗戦を迎えて収容所にいた草野心平を探し出し、親交と援助を惜しまなかった厚い友誼を、草野は記し留めている。

日中戦争が始まるまでの若き黄瀛は、詩集『景星』（一九三〇年）『瑞枝』（一九三四年）などによって詩人と

⑤〈詩史〉「神戸詩人事件」関係一次資料

季村敏夫

〈岬紘三昭和十二年六月細川基宛書簡　封書〉

拝福。お端書拝読致しました。実はもう少し朝早々頂きましたらお逢ひ出来ましたものと残念でなりません。去る二日の夜突然出発致しまして木曽路を通りました。地図を見ましたら伊那電鉄の赤穂と云ふ処がありましたから、多分其所で下車すればと考へました。しかし塩尻で乗換へ、その他時間を調べて見ましたところ、かなり離れてゐる様で、とても時間がなく一日で往復が不可能の様に考へられ、「上松」と云ふ駅で寝覚の床と云ふ名勝をさぐり長野へ下車してしまひました。長野の駅で、ああ云ふ拙信差しあげてゐる以上お返事がなくても素通りしたのがどうも気になつてゐましたので、お端書て考つつゐましたが、つい失礼してしまひました。返事がなく残念でなりません。帰神しますと、詩友たちがみな信濃の細川氏にお逢ひしたかと問はれますので弱りました。実を申しますと、信州線で是が非でも貴氏にお逢ひし、種々お話を承りたかつたのですが、どうも致し方ありません。長野から直江津に下車、岡崎余情氏に久々お逢ひ一夜御厄介になつてしまひましたが、そこで貴氏のお噂などがありました。

直江津から黒部へ廻り宇奈月一泊、ついで高山へ方等みゆき氏を訪問、鯖江下車、横山貞松氏にお逢ひし天の橋立へ演田晴美氏を訪ひました。予定をしつかり計画して参りますればお逢ひしたい方が多々ありましたが当地でごたごたありましたため突然出発してしまつたわけです。木曽、信濃路へは長年待望の旅でしたので、うれしいものでしたが貴氏にお逢ひ出来なかつたのがいちばん残念でなりません。波田氏宅で「個体」の話など出まして種々さまざまな会談に時を過ごしました。

いつかまたお逢ひ出る機会に恵まれる事と存じますから、それを楽しみにしてゐます。

当地「神戸詩人クラブ」を設立して半ヶ年になりますが、いまだ仕事らしい仕事もせず弱つてゐますがいづれ団体の仕事として素晴しい成績を得ることと運動中です。私たちの「以後」もこの上旬刊行（第二冊）の予定ですが私が前記の始末で遅れてしまいひ只今編纂とりかかつたところです。厚かましくも詩集刊行を思ひたち、亜騎保の今秋刊行についてなんとかまとめたいと計画中です。そのせつは何分ともにお願ひ致します。

乱筆ながら右まで。

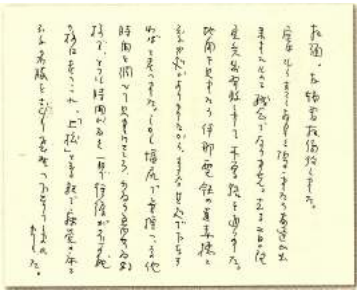
六月十三夜　　岬紘三

細川　基様

全く残念でなりません。欲を申せばお返事が遅かった様に存ぜられますが、当方の得勝手がこの様になつてしまひましたのでせふ。

【解題】消印は葺合。切手は四銭緑色。本文便箋四枚の筆記用具は万年筆、黒インク。封筒は和紙、表と裏は毛筆。本書簡は、神戸市御影町石屋字左美也一五七に住む岬紘三（本名、田部悦郎）が細川基に宛てたもの。細川の住所は長野縣上伊那郡赤穂村。一九〇七（明治四十）年長野県生まれ。詩集に『悪童生誕』（黒貌社出版・昭和四年）、『蝉』（北書房・昭和二十八年四月）そのほか民謡集、句集がある。細川はリアン浅間事件に関与した詩人と違い、素朴な実感を基礎にした抒情を展開、三年後（昭和十五）勃発する神戸詩人事件の関係者、亜騎保、足立巻一、津高和一らの交友の広さが伺われる。木曽路への旅は格別の印象をもたらしたようで、岬紘三は雑誌『映画無限』第十号（昭和十二年七月、発行所神戸市湊東区荒田町一丁目五六九―一一〇）へ「木曽路」と題した随想を寄せている。廣田好夫、亜騎保、岬紘三は『映画無限』同人でもあり、内務省警保局資料には、『映画無限』及び新開地の映画館朝日館で上映された『ひとで』『アラン』『貝殻と僧侶』への記述がある。亜騎保の未刊詩集タイトルは『神話主義雑考』、「神戸詩人クラブ」設立は昭和十二年一月十七日。なお岬紘三個人誌『滑車』四号（昭和八年十一月）に細川基の「白い羽」掲載。方等みゆきは『女人詩』という瀟洒な雑誌を刊行、一時神戸に居住、左川ちかとも交友があった。

〈第31号〉



異界にも眼がとどいていたのです。

杉山さんは松江高校文科甲類に入学した頃から映画に興味を持ち、映画のモンタージュ技法を媒介にした絵画的雰囲気や、現実生活に悩み生きる人々と共感する姿勢で解説する映画演劇論を書いており、大学でも講じておられます。

兵庫県現代詩協会で、「四季」について安水稔和さんとの対談を催しましたが、資料のことで杉山さんのお宅まで参りました。その折の書籍に囲まれた穏やかなお姿を今も思いおこします。平安をお祈りいたします。

⑪会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌／他県詩人団体発行本

★第32号（2012年12月20日発行、8頁）

①〈予告〉「ポエム&アートコレクション展～見ることでは示し得ない世界の渦を」2013年1月11日～22日。

場所・神戸文学館。▽詩を音楽にのせてコンサートは1月12日

▽「神戸を生きた詩人を語る」「綾見謙『兵庫の詩人』の世界」

1月19日「綾見謙『兵庫の詩人』の世界」たかとう匡子（司会・大橋愛由等）

▽ポエム&アートコレクション展の出品者／井之上幸代・大橋愛由等・和比古・香山雅代・佐藤勝太・眞田千穂・鈴木漠・高谷和幸・たかはらおさむ・玉井洋子・谷部良一・戸部多美・中島友子・中堂けいこ・西海ゆうこ・福永祥子・松下玲子・丸田礼子・三浦照子・水こし町子・山本真弓・由良佐知子

②〈予告〉「第一回・文学紀行」岡山後楽園と吉備路文学館を訪ねる。2013年3月10日。

③〈報告〉「ふれあいの祭典――詩のフェスタひょうご2012」

11月18日県民会館11階パルテホールで11時からジュニア部門の表彰式を開いた。「詩のフェスタひょうご」は今年で13回目になる。今回で変わったことがいくつかある。一つは一般の部の全国公募がなくなったことで、新しく2部として午後の1時から講演会と県外の詩人も含めた朗読会を持ったことである。

「詩のフェスタひょうご」を数字で見ると、出演・出場者が347人・観客（一部と二部を合わせて）116人、という数字になる。出演・出場者というのは作品の応募者のことで、前年と比較すると37人増えている。これは数字がとらえた一面であって、必ずしも今回が数量と質的に充実したものではないと選考委員にかかわった人は思うだろう。ジュニア部門は9月18日に締切、応募校48校、応募数347作品だった。最終選考会は9月30日に私学会館で午後1時からもつだ。選考委員は神田さよ、たかとう匡子、高谷和幸、玉井洋子、寺岡良信、時里二郎、永井ますみ、丸田礼子の8名で、第2次選考を通過した55作品について話し合った。結果は入賞

5作品、入選13作品が比較的早く決定した。その背景にあるのは学校からの課題作品の丸投げが多く、変わり映えのしない作品が多くみられたことが言える。選考した委員から詩の低下を感じたと感想が述べられたが、まさに今年のジュニア部門はその言葉が象徴しているように思う。残念なことである。

表彰式は掲載した写真を見ていただいたらよく分かるように、18人の入選・入賞者のうち8人の出席だった。式典のあったパルテホールが大きいだけに寂しさが際立つように思える。応募があった日にお礼のファックスを送り、入賞・入選が決まって、確認のためにもう一度電話を、その後パンフレットを同封して依頼文を全応募校に郵送した。しかし、当日までに欠席の返事があったのは3人だけだったのだが。

反面うれしいこともあった。田中みゆさん「かもの親子」（小3年生）の母親から電話がかかってきて、朗読をつまづかないように、作品を読む練習をさせたいのだが、作品のコピーしたものがないので送ってほしいとのことだった。その詩について選考委員会でも家族関係のあたたかい結びつきが話題になった作品なのでよく覚えている。私は作品をコピーしてお送りした。練習の成果があったのだろうか、ステージの上の彼女は作品を落ち着いて読むことが出来た。それを見ながら「かもの親子」に私はひそかに拍手を送った。

▽2部。小池昌代氏の講演と現代詩朗読の会を同会場を半分に区切り午後一時から三時まで開いた。朗読会は県外の詩人、会員外の詩人を含め10人の参加があった。ベテランの詩人から実験的な若手の詩人まで多彩な詩の声の競演となった。観客数は76人だった。

その後、ニューミュンヘンに場所を移して「詩を語る夕べ」が行われた。小池昌代さんの詩集や著書について、自由な発言や話し合いができ、心に残る有意義な会になった。

事務局　高谷和幸

④〈報告〉「歌と詩のあいだに―小池昌代さんの講演を聞きました―」玉井洋子

「ぐにゃっとして、身のうちにふわっとはいってきて、たちまち何かをうばって、ふっと消えていく、この力はなんだろう」。短歌の印象をこんな風に語る人はまずいないだろう。彼女の詩のみずみずしさの秘密は、いきものめいたこの感覚のダイナミズムに原点があるのかもしれない。

神戸ははじめてだという小池昌代さん。関西弁をきくと、魂をもっていかれるようなところがある。用心しなくてはいけないなと思う（笑）。ユーチューブで外国の詩人の声を聞く。テキストの外皮がやぶれ、相手との距離が狭まる。これは、声のもつ力。

日本には南と北に魅力的な詩の宝庫がある。沖縄の琉球歌謡、アイヌの「神謡」にも通底している。和歌の枕ことば、呼び出すもの（人間の意識のなかに形をのこす）にも通じる。

柿本人麻呂の「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」の歌などシンプルなことをうたっているのに演技的。和歌には作者が消えて歌がのこってきているが、現代詩はそんなふうには書かれていない。日本の現代詩が「歌」を拒否し、公共性を批判的にみてきたために。演技、虚構性を失い、詩がやせてきた。「公」から「私」を奪回しようとするあまり、結果として卑小な「私」をうたう方向にいってしまった。詩を共有するためには、凡庸をおそれないで自我を出したりひっこめたりする鷹揚さも必要。月並みをおそれず軽いことばを出していくと、波動がうまれ、波がうまれる。

「シロカニペ　ランラン　ピシカン　コンカニペ　ランラン　ピシカン＝（銀のしずくふるふるまわり　金のしずくふるふるまわり）」

お話の中で歌ってくれたアイヌの神謡〈さけへ〉の序詞。小気味よいリズムとさわやかなお声が耳についてはなれない。日本の詩歌の根幹へ、水平に垂直に、そして地球の裏側へとお話を拡散させながら、さりげなく私たちを詩の入口に誘ってくれた小池昌代さん。詩はまぎれもなく、私たちの日常の延長線上にある。

⑤〈エッセイ〉「樫の葉擦れを聴いて」鳥巣郁美

⑥〈書評〉「春から秋収穫の会員の詩集から」たかとう匡子／▽高橋冨美子『子盗り』▽季村敏夫『豆手帖から』▽佐藤勝太『峠の晩

---

⑨〈エッセイ〉「科学と詩と絵の境界で」
和比古

文学を含めた芸術は科学と別の領域に属すると人は言われるが、果たしてそうだろうか。物理学者であり随筆家である寺田寅彦の例もある。同じ次元とは言わないまでも、よく似た面をもっているともいえる。科学の世界の化学者の私か如何に詩と絵に魅せられてきたかについて、簡単に振り返って述べてみたい。

京都大学に入学したことが引き金になり、哲学入門書を読み始め、専門外のことで創造的なことをしたくなった。特に美への挑戦がしてみたくなり、油絵やクロッキーに興味をもった。高校時代には、ほとんど関心を持たず、美術はどちらかといえば苦手な科目であった。この変身は自分にとっても全く意外であった。また、興味のなかった文学にも魅かれ、漱石などの小説を読み始めた。インスピレーションとして感じる美を表現したい衝動に駆られた。しかし、写真のような手法には魅力がなかった。また、小説やエッセイのような散文的表現では長すぎる。かといって、短歌や俳句のような韻文は短すぎる。結果として、詩の世界に入っていった。刹那的心象を書きとめることにより、自らの感性を高めた。美術評論にも関心があったので、絵を見た印象を詩にすることもあった。研究室で研究をするようになってからは、化学の研究に夢中になり、詩を書いたり、絵を描くことが少なくなった。

30代半ばよりパワハラにあったため、人間的にいろいろと考えさせられることが多くなり、結果として再び書いたり描くようになった。詩を書くことで自分を見つめ直したり、さらに別世界を感じていたのかもしれない。

投稿詩誌に投稿し、活字として掲載されるのを楽しんでいた。また、評者によるコメントに一喜一憂した。狭い世界での個人的楽しみであった。活動の幅を広げようと、詩誌の団体に入るため多くの詩誌を読み調べた。結局、「ＰＯ」の水口洋治さんに直接電話をしたところ、悩むより自分の詩を詩誌や詩集で表現することが重要であると言われ、「ＰＯ」の会員になった。会合に時々参加して、詩人仲間と知り合いになった。活動の幅は広がり、アンソロジーで出版することも多くなった。さらに、個人でも詩集『構図のあるバラード』を出版した。魂を謳いあげるような詩を書いたため、難解な詩が多かったが、自分なりには納得した詩集であったと思う。

関西詩人協会、兵庫県現代詩協会、西宮芸術文化協会のメンバーになるとともに、「軸」に移った。全国的な詩人協会で活動しなさいと推薦してくれる詩人もいたが、無理をしない程度の活動にしている。

絵を描くように詩を書いていたので、両者を一度に発表できる詩画展は楽しみであった。絵と詩の融合である。年２～３回程度、自ら描いたパステル画と詩を展示した。私のパステル画は自ら学んだものである。

絵を気に入ってくださる佐相憲一さんのような詩人がいて、関西詩人協会自選詩集の第５集および第６週（別の絵）の表紙絵に使っていただいた。第二詩集「風の構図」、第三詩集「道化の構図」も出版した。これらの詩集では、各詩に一枚の絵を添付し、両者からなる世界を楽しめるようにしている。詩集に対し多くの詩人から本気の評や心暖まる激励をいただき心より感謝している。自宅の本棚には詩集や詩誌、壁にはパステル画が多くなり、創造的な空間を作っている。

本業の研究でも美を追求して、新たな研究を展開している。構造や機能が美しい分子システムを化学の世界で創製しながら、研究生活を送っている。研究の一端を紹介すると、平尾（本名）反応は美しい反応と評価を受けている。また、サッカーボールを割ったボウル状化合物は美しい構造をしているので化学美術館で紹介されている。短い段階でエレガントに合成している。また、誘導体化で得られた化合物の機能も美しいと期待されている。

著明な化学者が化学とは芸術だと述べておられる。化学の世界でも美的センスが必須であると考えられる。脳をいろいろな分野で可能な限り機能させればよりよいアイデアが生まれてくると考えている。定年までに自分で納得できるような、もう一幅の化学の絵が描ければと思っている。

化学に関する詩は書いたことがないが、いい機会なのでトライしてみた。

シミュレーション　　和比古

試験管をふれば
新しい物質ができる
どのようなものが現われるか
予想外のものが得られた場合は
単純に驚き喜ぶ
特に美しい構造や機能が期待できるときは
その楽しみが増幅する
人間関係も同じ
人との新しい出会いで
様々なコミュニケーションが可能になる
それぞれの条件により微妙に変化するので
面白いものだ
また、出来た化合物が美しく光ったりするように
楽しい語らいもあれば
腹の立つこともある
人間関係はフレキシブル
もっと予想外のことが起こるかもしれない
明日もいい出会いがあれば

〈第32号〉

霞』▽江口節『オルガン』
⑦〈エッセイ〉「『海馬』のこと」佐伯圭子
⑧〈エッセイ〉「島の猫」福永祥子
⑨〈エッセイ〉「科学と詩と絵の境界で」和比古（別枠に表示）
⑩会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌／他県詩人団体発行本

★第33号（2013年7月1日発行、8頁）

①〈報告〉第17回定期総会が5月19日神戸市ラッセホール「ハイビスカスの間」で定期総会を開いた。会員数169名のうち出席者35名、委任状84名、合計119名で規約により総会が成立した。松尾茂夫会長が体調不良のため、たかとう匡子副会長があいさつ、会場から時里二郎が議長に選出されて、事業報告・活動方針案・会計報告・会計案が承認された。規約に新しく事務局次長一名を加えることが承認を受け、役員選挙の結果により新しい役員の承認と紹介をした。役員は次のとおり。
▽会長（たかとう匡子）▽副会長（時里二郎、玉井洋子）▽事務局長（高谷和幸）▽事務局次長（神田さよ）▽会計（小西民子）▽常任理事／大橋愛由等＝出版・ホームページ、丸田礼子＝事業・書記、三宅武＝出版）▽理事（梅村光明、大西隆志、神尾和寿、中堂けいこ、渡辺信雄）▽監事（在間洋子、谷田寿郎）
▽2013年度の主な事業―☆ふれあいの祭典―詩のフェスタひょうご（10月20日、神戸市中央区ラッセホール）☆ポエム&アートコレクション展（神戸文学館で2013年1月14日から28日まで）☆文学紀行（3月）☆読書会（新企画・七月から八月に神戸市内の会場で第一回目を）☆隔年発行のアンソロジーの編集・発行☆会報発行（7月と12月の年2回編集・発行）
②総会の第二部「総会講演の要旨―「センスと意味」北岡武司」報告者・時里二郎▽朗読会（参加者＝内田正美、野口幸雄、水こし町子、山口洋子、山崎啓治）
③〈報告〉「ポエム&アートコレクション2013」報告者・玉井洋子
年あけ早々の1月11日～22日の会期で、第2回目となる ポエム&アートコレクション展が神戸文学館で開催された。のべ300人の来場者を得て、盛況のうちに終えた。
出品者／井之上幸代　大橋愛由等　和比古　香山雅代　佐藤勝太　眞田千穂　鈴木漠　玉井洋子　谷部良一　高谷和幸　戸部多実　中島友子　中堂けいこ　永井ますみ　西海ゆう子　福永祥子　松下玲子　丸田礼子　三浦照子　水こし町子　三宅武　山本真弓　由良佐知子
（出品者23名、作品26点）
（アートコレクション企画スタッフとして、大橋愛由等・丸田礼子・高谷和幸の3氏にご協力をねがった。併催の「兵庫・詩の現在展」には事務局によせられている県下の詩誌が展示された。
会期中2回の土曜サロンの催しとしてひらかれた1月12日の「詩を音楽にのせてコンサート」と19日のシンポジュウム「神戸を生きた詩人を語る」には、いずれも60人をこす来場者があった。
ゲストのバイオリニストの外薗美穂さんの人気もあってギャラリーも多く、バイオリンと初コラボの詩の朗読にも熱がはいった。朗読者は、瑞木よう、たかとう匡子、高谷和幸、玉井洋子、にしもとめぐみの5人。「神戸を生きた詩人を語る」の第1回目に「兵庫詩人」の綾見謙がとりあげられ、たかとう匡子、大橋愛由等の二名がパネラーとして登場。会場から、「兵庫詩人」の元同人福永祥子、丸田礼子の関連発言があり、豪放磊落、繊細でふところの深い詩人・綾見謙の人間像がうきぼりになった。
ことしの「ポエム&アートコレクション」を総括して、可能性が次につながる企画であったという声もきかれたが、作品展を続行するには、やはり展示のためのスペースの問題点がのこった。前回からもちこしてきた懸案事項なので、パネルをリースするなどして改善をはかりたい。
④〈報告〉「文学紀行」報告者・高谷和幸（別枠に表示）
⑤〈エッセイ〉「平和憲法は時代錯誤か」直原弘道
⑥〈エッセイ〉「近況報告」季村敏夫
⑦〈エッセイ〉「藤忌」由良佐知子
⑧〈報告〉「ポエム&アートコレクション2013に参加して」眞田千穂
⑨〈書評〉「冬から春収穫の会員の詩集から」たかとう匡子／▽和比古『道化の構図』▽住吉千代美『分水嶺を越え』▽たかぎたかよし『うつし世を滕る』▽山口洋子『魔法の液体』▽佐伯圭子『繭玉の中で息をつめて』▽福田知子『ノスタルギイ』
⑩会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌／他県詩人団体発行本

★第34号（2013年12月20日発行、8頁）

①〈予告〉第3回　ポエム&アートコレクション展▽第2回　文学紀行▽ふれあいの祭典―詩のフェスタひょうご
②〈報告〉北川透氏の講演会「いま、詩は何処で生きているか」報告者・梅村光明（別枠に表示）
③〈感想記〉「現実とせめぎ合う詩―「北川透」読書会に参加して」報告者・渡辺信雄（別枠に表示）
④〈エッセイ〉「お話しましょう」在間洋子
⑤〈エッセイ〉「水上勉の思い出」足立勝歳
⑥〈作品〉「誹風久米の仙人」渡部兼直
棚引く／雲の絶え間より／久米どさり（＊1）／あれえ／仙人さまあ／濡れ手で抱き起し（＊2）／骨つぎ／温泉治療／仙人考へ変へ／白ら萩の女（＊3）／所帯持つ／変なひと／はしたない／ささやく／けどふたり／

④〈報告〉「文学紀行」「広い心の繋がりを」高谷和幸

会員の親睦と他県の詩人団体との交流を目的に文学紀行を企画してきた。兵庫県現代詩協会が発足した初期に一度だけそのようなバス旅行（徳島）があったと聞き及んでいるが、およそ15年ぶりの試みである。
大型バスの空席が気になるところだが、18人の参加をえて集合場所の三宮・加古川を経由して岡山県を目指した。車中では自己紹介をしながら、それぞれの活動の話をしながら楽しいひと時を過ごした。
到着後、まずプラザホテルで昼食をとり、吉備路の食材を活かした料理に満腹。その後、後楽園の梅林に向かった。曇り空で肌寒さを感じる天候だったが、野芝を大量に使った明るい庭園が視界に広かった。沢の池から唯心山が見え、その借景に岡山城を望む地点は絶景で写真撮影をする人を多く見かけた。後楽園の入り口から一番奥にあるのが梅林で、折しも満開であった。鶯の鳴声などを聞きながら一時間あまりの散策を楽しんだ。
吉備路文学館に予定より早く到着したが、文学館職員が迎えに来られるなど手厚い歓迎を受けた。時間的に窮屈な環境だったが、開催中の夏目金之助（漱石）の書と画を説明を受けながら見学した。
交流会の最初に館長の遠藤氏から挨拶があった。公益文化財団としての取り組みや、兵庫県在住のよく知っている詩人の名前が出るなど兵庫県との結びつきの強さを語られたのが印象に残った。次に岡山県詩人協会会長の高田千尋氏から永瀬清子の詩と詩論について講演を聞いた。会員が朗読する5篇の詩を立体的に永瀬清子詩を解説された。存命中の詩人の側近におられた氏ならではのエピソードを聞くことで、より身近に永瀬清子を感じられる講演だった。最初に永瀬清子は想像力の詩人だと言われたことがいつまでも印象に残っている。
最後に兵庫県の会員と岡山県の会員の自己紹介の時間が持てたことは大きいと思う〈第33号〉

しあはせ／しあはせつづかない／あれえ仙人サマ／霞になる／雨になる／霊になる／ほんとに／仙人になる

＊1＝誹風柳多留八十二篇　＊2＝誹風柳多留十九篇　＊3＝白ら萩　白ら脛　掛詞

⑦〈エッセイ〉「微笑みが凍りつくとき」鈴木豊子

しゃれや面白いことが大好きだったシェイクスピアは作品の中に多くの道化を用いた。中でも傑作喜劇『お気に召すまま』や『十二夜』に登場するタッチストーンやフェステは「愚か者の隠れ蓑から機知の矢を放つ」賢い道化―wise fool―として、劇の中心で活躍する。

喜劇だけではなく、悲劇の中にも彼は道化を登場させた。『リア王』のフールである。宮廷道化の流れを汲むフールはつねに影のようにリアに従い、鋭い風刺を浴びせながらも落魄の王と行動を共にする。リア王と、彼が愛するフール、コーデリアはこの劇を支える重要な三本の柱といってもよいだろう。

しかしそんなフールを、劇の中点ともいうべき三幕六場でシェイクスピアはとつぜん舞台から「消して」しまう。何の伏線も、何の言及もなく、その後にフールの消息も杳として知れない。どうして彼はこんな粗いやり方でフールを行方不明にしてしまったのだろうか。

考えてみるとこの劇の後半は、眼球を抉りとられたグロスター、伴狂の裸のトム、狂えるリアなどが縺れあって悲劇の緊迫度はいっそう高まり、さらにコーデリアの衝撃的な扼殺、その遺骸を抱きかかえたリアの悲嘆死という終幕のカタストロフィへ向かっていっきに突き進んでいく。あまりにも陰惨、苛烈、言葉を失うその展開の中にもはやユーモアの介在する余地はない。道化は文字通り「出る幕」を失い、そんな道化をシェイクスピアは劇の要請に従い（心ならずも）追放してしまった――ということができるのではないだろうか。

炎暑が身を焼いた今年の八月、この国の副首相なる人は憲法改正問題に絡み「それを喧噪の中で行うのではなく、ナチスの手口を真似て、行ってはどうか」といった趣旨の、とりようによっては「血も凍るような」恐ろしい発言をした。

内外の批判が集中する中、ひとり某大阪市長のみ「ブラックユーモアだったのでは」と援護射撃を行ったが、この発言に対し、米国ユダヤ系人権団体「サイモン・ウイーゼンタール・センター」のエイブラハム・クーパー副代表は「広島、長崎、ナチス、大虐殺にジョークの入り込む余地はない」と強く批判している。

非常に残念なことだが、この世には微笑みが凍りつきユーモアが扼殺されるような世界がたしかに存在する。そして、かつてシェイクスピアが愛する道化を葬ってまで描きぬこうとしたのも、そのような世界ではなかったのか。『リア王』が現代の悲劇であり、シェイクスピアが「われらの同時代人」であるといわれる所以も又そのようなところにあるのではないかと思われる。

しゃれや面白いことが大好きという点だけは人後に落ちないと自負する筆者としては、道化が最後まで生き長らえるような世界の出現を心から願ってはいるのだが。

⑧〈エッセイ〉「いやあ、実は頭が悪くて」永井ますみ

⑨〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽安水稔和『ぼくの詩の周辺　初期文集１９５０～６０年』▽永井ますみ『永井ますみ詩集』▽彼末れい子『詩集・ことばによる原色きのこ図鑑』▽井口幻太郎『奇妙な商売』▽山崎啓治『粋なべべ』▽植村孝『未達の夢』『詩人の事件簿』

⑩会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌／他県詩人団体発行本

⑪〈訃報〉金田　弘（８月逝去）、戸部多実

②〈報告〉「北川透氏の講演会「いま、詩は何処で生きているか」梅村光明

詩は明治初期にヨーロッパの詩を紹介した『新体詩抄』から始まった。新しい詩としての新体詩。形式をどうするかを考え、漢詩の形を取り入れた実験詩を書いた。

その後、明治・大正時代、自然主義の影響により詩の世界で揺らぎが生ずる。自然主義からすると、新体詩は形が窮屈に思われ、口語自由詩が出てくる。その橋渡しの役割を果したのが北原白秋。旧世界を受け継ぎ、新世界を切り開いた。そこに萩原朔太郎が登場する。

口語自由詩を内容的に言えば近代詩になり、それは現代詩の始まりでもある。今、私たちが書いている詩は、口語自由詩の延長線上にあるが、形式がはっきりしない。

平田俊子の「ネンブツさん大忙し」は、詩なのかどうか。その答えは作者がこれを詩だとして発表しているから詩。でも明治・大正では詩として認められなかっただろう。詩の基準がはっきりしていたから。このブラックユーモアにはシュールな感覚があるので、私は詩と認める。

詩にはフォルムとスタイルがあると私は考えている。フォルムは個人の考えや、感覚とかモチーフなどに影響されない。その反対に、影響されるのはスタイルだ。

詩を考える時、分かり易く言えば、文体はスタイルであり、個性はスタイルに影響を与える。その反対に、影響されず変わらないのがフォルムである。

戦後、鮮やかなスタイルの詩人と言えば吉本隆明であり、私の好きな詩は「少年期」。大人の世界の縮図。見えない関係を予測される詩句。つまり、社会的な抑圧に対する不服従。内的な根拠、モチーフがはっきりしている詩。これが吉本の詩のスタイルである。自己表現としての詩とも言える。

入沢康夫の、「季節についての試論」は、何か書いてあるのか分からない。一字空きで別のことが書かれていく、物語を作らないという手法の詩。フォルムだけがあり、感覚の表層を滑るような詩。するどい破片が埋まっている、言葉が言葉を語っている世界が入沢のスタイルだ。内的根拠は見えないけれど、個性は見ることができる、いかにも吉本の世界とは正反対なのだ。

井坂洋子の「返歌　永訣の朝」は、宮沢賢治の作品を誰にも分かるように持ってきている。けんじゃは賢者と賢治兄が響き合っている。それにより色々なものを想像させる効果を狙う意識を持って、平田はひらがなにしたパロディーという書き方であり、過去に書かれ残された詩がなければ誰も詩を書けない。パロディーは別の作品がなければ成立しない。批評的な感覚は風刺に変わる。

全ての詩はパロディーである。

詩と詩の関係の中で詩は存在するというように意識しないと、自分の詩は書けない。多くの詩の累積の上に私たちの詩がある。そのように考えないと過去の詩は存在しないし、現在の詩も存在しない。

〈第34号〉

③〈報告〉「現実とせめぎ合う詩―北川透」読書会に参加して―チューターたかとう匡子―

渡辺信雄

兵庫県現代詩協会として始めての読書会は、詩人北川透さんを取り上げ約30人が参加した。

まず、たかとう匡子さんが、北川さんは60～70年代の「情況の中で自分の立場を認識できるのが言葉。表現したものは闘争の中で負けても残り、死なない」と、表現の自立に徹した詩人であり、「詩と反詩の境界線ぎりぎりの詩を成立させようとした」と話した。

北川さんのテキストは、初期詩集の『眼の韻律』と『闇のアラベスク』。参加者が所収されている散文詩を朗読。私も含め「読みづらかった」という声が多かった。当時の政治運動の生な言葉、猥雑な表現が詩に塗り込められている。これも、作者の方法論の一つ、という意見。個人的には「眼の韻律」で多用されている「眼」のことが気になっていた。

それが眼に見えないからといって　きみは罪
をのがれることはできぬ　きみが告発している
るとききみは告発されているのではないか
（略）ぼくらの眼はえぐりとられて事物の側か
らぼくらを注視する…　（「無題」から）

身体の一器官としての眼ではなく、詩に表現されている意識化された「眼」、あるいは「義眼」とは何なのかと思った。時里二郎さんは、「眼の韻律」について「この韻律は響きではなく、言葉の音楽的なものを拒否している。詩にありがちな曖昧なものを排除している。眼は内面的なもので、見なくてもいいトロトロとしたものまで見ている。想像力を網膜に写し現実とせめぎあう詩」と語った。

おおむね、私もそのように理解しつつ、実際に片眼を抉られて、義眼である私にとっては、これらが思想的言語だとしても、痛い。北川さんにそのことを確かめたいと思った。眼は現実とせめぎあう入口であり、出口である。眼差しは、精神の指し示す方向である。世界は見えないことの方が多い。限られた視野から何を見るべきなのか。「詩人」は個の眼力を鍛えねばならない。

石山淳さんが「いま、地方で現代詩の詩集を手に入れることもできない」と話したが、同感である。詩集の流通の少なさに現れているように、マニアックなものになってしまった感がある。北川さんは、いみじくも「詩人は、読者を獲得できるか」と語っていたように、他の文芸ジャンルと比べてはるかに読者数が少ない。かつて北川さんは、俳句誌「日曜日」（１９９０年）のインタビューで、「現代詩は本質的に子供の文学。…詩はいま危機に直面している。俳句のように老人の娯楽としても生き残れない。若い人たちにも見捨てられそうだ。そうなったらもう駄目。非常に限られた人たちの知的遊戯になるかも知れない」と、語っていた。

予測どおり、その後20年を経た時代の変化の中で、若い人たちに見捨てられ、危機感を通り越した状況にある。詩の商業雑誌の衰退や、同人誌から個人誌への変化は、詩の拡散化、多様化をもたらしている。

詩を書くことと、生き方とは無縁ではありえない。表現媒体や方法が多様にある中で、詩を書く意味を問わざるを得ない。詩に救いを見いだして、書いている者は、独自な書き方で現実と格闘するしかないだろう。

〈第34号〉

⑫〈報告〉「「神戸空襲の碑」が建ちました」

玉井洋子（神戸空襲を記録する会）

今年はとりわけ暑い暑い夏でした。二〇一三年八月、戦後六十八年目にしてようやく神戸市の大倉山公園に「神戸空襲の碑」が建ちました。八月十五日の除幕式には神戸市長をはじめ八百人を越す参列者がありました。炎天下にもかかわらずひとりの救護者も出すことなく無事除幕式を終えることができました。

総重量七トン、白御影石（２０００×６００×２４００ｍｍ）の前面には「神戸空襲を忘れない　いのちと平和の碑」と明記され、その下に碑文がかかげられています。裏面にはこれまでの調査で判明したＩ７５２名のお名前が刻まれています。その横には、その何倍もの空白がありますが、これこそ八千人をこすといわれる神戸空襲犠牲者のいまだ判明しない方々の存在を証しするものなのです。

六月、業者にわたす名簿の最終チェックを手伝いながら、私は胸がいっぱいになりました。読み上げられるお名前のひとりひとりがかつては誰かのお父さんであり、お母さんであり、町内会長さんであったりした。暮らしがそこにはあったのです。

皆様からお寄せ頂いた浄財でこの碑は建立されました。

未来をになう子どもたちに、郷土の歴史として空襲の事実を伝え、そして、ここから世界にむけて平和のメッセージを発信していける、そんな場としてみなさんで見守り、育んでいっていただけたらと願っています。

あたたかいご支援をいただき有難うございました。厚く御礼申しあげます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

★第35号（２０１４年７月１日発行、８頁）

①〈報告〉第18回定期総会は、五月晴れの快晴にめぐまれて定期総会を５月18日ラッセホール（神戸市中央区）のハイビスカスの間で開催された。会員数Ｉ７４名のうち48名の出席、委任状85名と当日の欠席者が５名あった。今年度活動報告、来年度活動方針案、今年度決算、来年度予算案全て、議案通り承認された。

▽２０Ｉ４年度の主な事業内容=☆「読書会」２回開催。５月31日に「萩原朔太郎を読む」☆第26回「ふれあいの祭典 詩のフェスタひょうご」10月５日にラッセホールで午後１時から５時まで開催。阪神・淡路大震災から20年目を迎え、共有する「場」をテーマに藤井貞和氏の講演会と朗読会を予定。☆「会報特別号の発行」〈震災詩集「阪神・淡路大震災から20年を想う」と題して会員から作品を募集して発行する〉☆「ポエム＆アートコレクション展」神戸文学館で２０Ｉ５年Ｉ月11日から24日まで開催。併設展示「兵庫の現在展」、阪神・淡路大震災から20年目にあたる17日にシンポジウム「兵庫を生きた詩人」。24日に朗読会。☆「文学紀行」２０Ｉ５年３月に予定。☆「会報」７月と12月の二回発行。☆兵庫県現代詩協会のホームページの充実。（報告者・高谷和幸）

②〈報告〉総会での講演会「神尾和寿「沈黙」から「沈黙」へ」

報告者・大橋愛由等

その名前を聴いただけで、「難解」のレッテルを貼ることに満足してしまい、それ以上に理解の翼をひろげることを躊躇してしまう哲学者である。ウィトゲンシュタイン（1889-1951）。兵庫県現代詩協会の年次総会に続く講演会で、神尾和寿氏は、オーストリア生まれのこの哲学者を取りあげて語り、さらには詩の言語にひきよせて、この哲学者が提示した命題を解題してみせたのである。

提示のテーマは、〈「沈黙」から「沈黙」へ〉。神尾氏の語りはまず前期の主著である『論理哲学論考』について言及する。「語りえぬものについては、沈黙しなげばならない」という有名なテーゼを紹介。これは、「考えられないものについては考えられ得ないということに、無自覚なまま無謀に乗り越えようとしてきたのがこれまでの哲学だった」との分析から導きだされたものである。

そこで次に、同著に書かれた言語観をもとに「語りうるもの」と「語りえないもの」とはいったいなんだろうかを示した。論理性に貫かれている言葉・世界・事物と結びついてるものについては「語りうる」が、事物の結びつき等の論理性自体は「語りえない」。また、「神秘的なもの」も語り得ない、とする。

講演はつづいて「沈黙」についての考察になった。ウィトゲンシュタインは、語れないものを語ろうとするのは、無意味であることをはっきりさせ沈黙しなければならないとする。

こうした前提を受けて神尾氏は、「語りえない」ことを「語りうる」ものの次元にひきおろし扱わないようにしたり、永遠だの愛だのいえば詩が成立するかの錯覚に陥らないようにするべきとの思考に同意しつつ、例えば「語りえない」ものの一つである「神秘的なもの」からの呼びかけはあり、そうした呼びかけの瞬間に詩は発生するのではないか、と語ったのである。

③〈報告〉「第３回ポエム＆アートコレクション展」報告者・玉井洋子／１月14日～28日実施。

▽１月14日～28日まで、14日間の日程で第三回ポエム＆アートコレクション展が神戸文学館で開催された。

出品者　24名、作品数28点。

出品者 井之上幸代　梅村光明　大西隆志　大橋愛由等　和比古　香山雅代　佐藤勝太　鈴木　漠　谷田寿朗　高谷和幸　玉井洋子　谷部良一　中島友子　中堂けいこ　西海ゆう子　坂東里美　福永祥子　丸田礼子　牧田榮子　三宅　武　水こし町子　山本真弓　山本美代子　由良佐知子

▽詩の朗読会１月18日。来場者20人

出演者　高谷和幸・玉川侑香。永井ますみ・にしもとめぐみ。福永祥子・丸田礼子・望月逸子

⑨〈詩論〉「詩と抒情性」

柴田 実

中野重治が「お前は歌ふな／お前は赤まゝの花やとんぼの羽根を歌ふな」と書いたのは大正十五年である。抒情詩否定の嚆矢であろうか。しかし、中野の詩は、その卓越した韻律と抒情性故に今も読まれているのだと私は思う。

小野十三郎が『詩論』で「短歌的抒情」を否定したのは昭和二十三年である。短歌や俳句が持つ感傷性を否定し、批評精神を現代詩に求めた。だが小野の詩集『大阪』の巻頭詩は「早春」。「ひどい風だな。呼吸がつまりさうだ。／あんなに凍ってるよ。」と書く。この詩の魅力は、殺伐とした河口の工場の風景とそこに吹く風の冷たさである。今読んでも寒風が吹いてくる。小野の詩にも抒情性が付きまとっている。

現在、俳句人口は一千万人、短歌人口は数百万人といわれている。もちろん正確な数字ではない。しかしＮＨＫＥテレは、毎週「俳句」と「短歌」の放送を行っている。著名講師が投稿作品の添削を行う。それを見ているとこの数字は満更でもないと思う。

俳句に季語があり、短歌も季語と密接な関係を持つ。季節感、言い換えれば抒情性を必要とするのが俳句や短歌。多くの人々が抒情性を柱にして創作に励んでいる。短歌、俳句、現代詩を含めて私は広く詩と考えるが、詩に抒情性が必要でないとの考えを私は理解できない。抒情詩を書く大は批評精神が欠けているとも思わない。

紀貫之は『古今和歌集』の「仮名序」で歌論を展開している。千百年前のことである。詩歌を大局的に捉えており、今読んでも納得がいく。

「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」。貫之はここで歌の技法を六つ上げる。「そへ歌」「かぞへ歌」「なずらへ歌」「たとへ歌」「ただごと歌」「いはひ歌」。今考えても優れた分析だ。

そして都合二十巻に及ぶ『古今和歌集』を、春、夏、秋、冬、賀、離別、羇旅、物名、恋、哀傷、雑と部立てする。なかでも四季の歌と恋歌が大きな柱となっている。四季が主要なテーマの一つとなっているのは万葉集もそうである。貫之は次のように書く。「花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心、言葉多くさまざまになりにける」。全く同感である。

貫之はさらに書く。「春の朝に花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは、年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とを嘆き、草の露、水の泡を見てわが身をおどろき」と。そして「歌にのみぞ心をなぐさめける」と。

日本人は四季の移ろいの中で、人生を思い、心を慰めてきたのである。貴族趣味が多少はあるが、自然な心のありように基づく歌論である。現在まで続く日本の詩歌創作の基本が『古今和歌集』において形作られたと言ってよいだろう。この考えが連歌、俳句へと受け継がれ、近代に「季語」という言葉が生まれている。

日本には二十四節気と五節句がある。立春に始まり大寒で終わる二十四節気。季節の兆しを捉え、繊やかに季節の変化を教えてくれる。この暦は農作業の時期を教えるタイムスケジュールでもある。刻々と移りゆく季節を持つ日本の風土が、繊細な感情を育んできた。それが「湿潤」だと言われようが「感傷的」だと言われようがかまわないではないか。なにせこれは巧まずして生まれてきたものであるのだから。むしろ日本人の美質と考えるべきである。どんなに近代的精神によって否定されようが消えるものではない。

「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり」

私は道元のこの歌を今読んで感動する。

たしかに日本の伝統詩歌が表現しなかった分野は多くあるだろう。だから現代詩は、自由な方法で幅広く表現してよい。だからと言って抒情性を否定する必要はないのではないか。

〈第35号〉

▽兵庫・神戸を生きた詩人を語る―VOL・2
　足立巻一、その詩と散文の仕事。講師は昨年に続いて会長のたかとう匡子。「足立っあん、と呼ばれ、多くの人に慕われた詩人のそのひととなりと、彼がのこした文学の功績を熱く語られた。来場者30人。
▽兵庫・詩の現在展　事務局に届いた会員の詩集・詩誌が展示された。新春早々の催しとあって、会場には手作りの獅子頭も展示されてお正月ムード。熟達の作品がならぶ中、今年初出品の坂東さんのオブジェがひときわ目を引いた。パソコンで多様にならべられた活字があざやかな文様となり、白と黒のホップなアート空間が展開されていた。館内に目を転じると、兵庫県下の出版物コーナーに見覚えのある詩誌を発見。前出の作家は個人誌の表紙を毎号この意匠で飾っていたのだった。出品作品と、会員さんと、詩誌とが一つにつながった。ポエム&アートコレクションに奥行が感じられた一瞬だった。来年は、阪神・淡路大震災から20年という節目の年。
④〈報告〉「第2回読書会―中原中也―」報告者・三宅 武
　2013年1月30日、私学会館で開催（別枠で表示）。
⑤〈報告〉「第2回文学紀行」報告者・神田さよ／3月2日実施。参加者は17名。
　天候の心配をよそに快晴の一日であった。三宮区役所前を定刻8時30分に出発。JR木之本駅に11時頃到着。木之本は古くは、宿場町であり、その名残の街道並木には馬や牛を繋ぐ金具が残っている。古い醤油店、酒造屋、本陣薬局などがレトロな雰囲気を醸し出している。木之本地蔵院は眼の仏として信仰を集めている。地蔵下の暗闇の戒壇巡りを体験した。12時に「すし慶」に集合。二段弁当で昼食。その後、バスにて渡岸寺へ向かう。十一面観音と対峙する。寺の敷地には戦国の時代、戦火から村人たちが、地中に埋めて観音を守った跡が残り、井上靖の文学碑も見学。14時40分、長浜到着。各自散策。慶雲館で開催中の盆梅展へ足を運んだ方々もあった。18時30分三宮到着。一日共に過ごし、会員の交流が深まった企画であった。
⑥〈予告〉会報特別号「阪神・淡路大震災から20年を想う」（本誌14頁に紹介）
⑦〈エッセイ〉「壺と甕の話」江口 節
⑧〈作品〉「槇道」山名 才
⑨〈詩論〉「詩と抒情性」柴田 実（別枠に表示）
⑩〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽寺岡良信『亀裂』▽在間洋子『生樹の門』▽伊丹公子『伊丹公子全詩集』▽いりえだよしひと『宙の墓』▽宮川守『あと半分　もう半分』▽大塚子悠『麦藁帽子』▽黒田ナオ『夜鯨を待って』
⑪会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌／他県詩人団体発行本

④〈報告〉「「第2回読書会―中原中也―チューターたかとう匡子」報告者・三宅武

　第一回の北川透につづき、第二回読書会は、中原中也を取り上げた。たかとう匡子会長が資料をもとに、以下の基調報告を行った。資料には、中也の年譜と、『山羊の歌』より七篇、『在りし日の歌』より八篇の詩が取りあげられている
　大岡昇平が、その著『中原中也』の中で、徴兵され、フィリピンに送られ、軍務で立哨中、つい口をついて出てきたのが中也の詩「夕照」であった、という部分が紹介された。大岡は、東京で中也と知り合ったが、当時の中也の激しい個性から逃れる意味もあって、京都大学に入った。（ここで大岡昇平の同書が回覧された）
　中也の詩は、時代に即して多様な読まれ方がなされている。しかも読み手が、自分流に読んでなお、訴えるものを内蔵していることが、今日も読み次がれている理由である。
　たとえば、資料の詩「冬の長門峡」は、一人の若者が治安維持法で逮捕、拷問により殺された事件が背景にある、堀田善衛の「中也体験」の話。
　詩「月夜の浜辺」の背景にある満州事変と生活物資の不足等々、出来上がった詩には、ひとつのことをテーマに据えて、書かれているように見えるが、時間も空間も異なる複数の事柄を重ねて、中也詩が書かれていることが効果的で、読みつがれてきた幸運がある。
　それぞれの評者は中也の詩を通過点として自分流の作品論、中也論を書いたことを見ると、中也の詩が評者の心の中に響き渡っていることについて改めて評価したい。
　たかとう氏は金沢を尋ね、中也が通ったという幼稚園がキリスト教であったことを知った。幼稚園の近くに定期的にサーカスがかかっていたという話も聞いて、「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」を思ったそうだ。
　ほぼ以上の話のあと、参加者からの発言があった。
○あえて中也のファンではないが、判り易い詩と。難解な詩に分かれているように思える。
○回覧中の大岡著『中原中也』の一文を読み、中也と同棲中の長谷川泰子が、小林秀雄のもとに去るとき、中也は、泰子の荷物を小林のもとまで運んでやったこと。また当日の小林秀雄、泰子の様子を、リアルに描写したページが読まれた。詩「朝の歌」は、この事件の半年後であった。
○中也は好きではないので、あまり読んでいない。「汚れっちまった悲しみに……」に、通俗性を感じてきたが、今日、考え方がかわってきた。一九三四年という時代を考えると、当時は映画もそれほど発達していないであろうと思うが、詩「春と赤ん坊」の描く動きには、映画に似た新しさがあるようだ。
○資料の年譜には、県立山口中学校に十二番の成績で入学したとあるが、八番で入学という資料もある。以後成績が下がり続けていくが、原因は、生田春月に傾倒し、読みふけって学業成績がふるわず、やがて五十番になり、百番になったらしい。
○あまり深入りした読み方はしなかった。今日、前向きで、攻撃的な詩人なのだと思った。
○サーカスだったのか、高校生のとき読んで、ブラシコの揺れる印象として残っている。
○叙情とリズムは詩に必要だ。
○大岡昇平、富永太郎との出会いが中也を育てたのだと思う。
○中也のお母さんが物心両面の援助をしている。中也は一生働いたことがない。また長谷川泰子が後年、中也のことを書いている。また中也は、泰子の子どもの名付け親になったりして、不思議さがある。
○「汚れっちまった悲しみに……」のフレーズはあちこちに引用されて知っていたが、時間的なズレが面白いと思う。また、過去に起こった出来事を、作品の中に持ち込んで、「春と赤ん坊」になったのではないか。誰でも知っている素材を、時間が経ってから手を入れている。女性に対する興味が、深かったと思う。ランボー、ボードレールを知って、自分の世界を作ったと思われる。
○中也という人は、ふいに心に浮かんでくる詩句が多い詩人だと思う。
○中也には詩の原型の如きものがある。いい勉強になった。
　参加者は二十八名。ほぼ、以上のような雰囲気の会であった。次回からは、録音の用意も必要だと思う。〈第35号〉

★第36号（2014年12月20日発行、8頁）

①〈予告〉▽「第4回　ポエム&アートコレクション展」＝神戸文学館（神戸市灘区）にて2015年1月11日～24日に開催。☆講演「阪神・淡路大震災から20年にむきあう」たかとう匡子（司会・大橋愛由等）
▽「第3回文学紀行」＝丹波篠山と生野銀山へ。2015年3月15日
②〈報告〉「ふれあいの祭典―詩のフェスタひょうご」10月5日ラッセホール（神戸市中央区）にて開催＝報告者・高谷和幸
　台風18号が日本列島に接近していた。数日前から気象衛星からの雲の動きが撮影されていて、誰の目にも台風の目がくっきりと分かるようになり、しかも急速成長した台風は最大瞬間風速45メートル、中心気圧965ヘクトパスカルで近畿に接近していた。常任理事の中からも10月5日の開催を危ぶむ意見が出され、さらには兵庫県芸術文化協会から当日は本当に開催されるのですかと確認の電話がかかってきたりもした。こればかりは予測のできない自然相手のことだとあきらめずにはおられない。しかも講演のテーマが「詩は抗う地球のノート」である。詩に自然の猛威に抗うほどの力があるのか不明だが、信じて「ある」にかけてみるつもりだった。
　それだけではなかった。講師の藤井貞和氏の当日の動きは東京を朝に出発し、神戸に昼過ぎに到着。その日は神戸に一泊し翌朝早く神戸を発って昼過ぎには東京に帰られる日程だった。これでお分かりのように台風18号の動きと不気味なぐらい時間が符合するのである。

★特別号「阪神・淡路大震災から20年を想う」（2014年12月17日発行、20頁）

★兵庫県現代詩協会の会報は年に2回の発行ですが、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災から20年を迎えるにあたって、特別号を発行いたしました。協会会員の皆さんに作品を募集したところ、45名の書きおろし作品が集まりました。／会報特別号編集担当〈大橋愛由等記〉

〈巻頭辞〉詩を書くひとりとして　たかとう匡子

記憶をめくると、一月十七日が巡りくるたびに、神戸にはモニュメントがあり、回想の回帰があり、新聞やテレビでの報道があり、それが今年で二十回繰り返されてきました。そのたびに私たちには私たちひとりひとりのあの日の記憶がよみがえってくるというべきでしょう。二階の廂をそのまんま地面につけた家。割れた大地によって立つ根拠を失って、胴体をまっぷたつに裂かれた家。将棋倒しになったのや、横すわりのや、尻餅をついたのや、腰くだけのや、満身創痍のや。そしてあちこちの高層ビルの中間階がつぶれ、ビルとビルのあいだ、集合住宅と集合住宅のあいだに架かる空中歩廊が落下し、外れ、その瞬間に瓦礫となった私たちひとりひとりの街。こうして書いているとそれらひとつひとつをひっくるめるかたちで記憶は鮮明です。

神戸はたしかに、あの日から二十年経ちました。いわゆる大都市を直接襲った地震としては関東大震災に次いで神戸だったのですが、当時、まだ全国の詩人たちにとっては、地震への意識は今ほどではなかったように思います。けれどもそのあと、伊豆半島沖の群発地震、根室沖の、三宅島や小笠原諸島の、そして3・11東日本大震災の、というように日本の各地で頻発するようになり、とりわけ3・11以後は地震、津波、原発による放射能の危険性にまでその思いは及ぶにいたって、今では地震は日本中どこで起きても不思議ではない、自分たちの生活の、いのちの問題として受けとめられるようになってきました。

神戸では、三ヵ月後にアート・エイド・神戸の編集で『詩集・阪神淡路大震災　第1集』が「惨禍を越えて155名の詩人が証言する激震の世界」として刊行され、翌年の一月十七日には129名が鎮魂と再生を、そして二周年を前にして同じく129名の詩人による第3集『復興への譜』などが刊行されました。第1集「編集メモ」にはこの詩集に賛同し、参加した詩誌として「柵」「叢生」「アリゼ」「MESSIER」「現代詩神戸」「第三紀層」「灌木」「海」「輪」「プラタナス」「たうろす」「火曜日」「めらんじゅ」「豹樹」「風媒花」「兵庫詩人」「幻想時計」「別嬢」「BELLSAISON」「播磨灘詩会」など神戸市内阪神間在住の詩人のみならず遠い地域の詩人たちの賛同も得たと記されています。まだライフラインもままならないのにアート・エイド・神戸実行委員会を立ち上げ、多くの詩人たちへの結集を呼びかけた伊勢田史郎さんらの迅速な行動がこういった大きな貴重な記録につながったのでした。

今思うのは、全国的にはこういった神戸での詩人たちの表現活動が「大変でしたね」という言葉とともに「あれは神戸でのこと」というふうだったことです。たしかに3・11は地震のみならず、津波、放射能があり、ジャーナリズムが集中する東京での体感や、水と空気、食べ物による汚染など、直接我が身にふりかかってきたこともあって、地震は全国の詩人たちの関心事となりました。けれども、考えなければならないのはそれでいいのかという思いです。

神戸はまさに大地震を原体験しました。そのうえに3・11でふたたび大地震を追体験したおかげで、私たち自身、我が身にふりかからなければよそごとですましていいかという問いを突きつけられたのではないでしょうか。阪神・淡路大震災から二十年。世界はそのあいだにイラクの攻撃があり、アフガニスタンでもスーダンでも、イスラエルやレバノンでも空爆があり、劣化ウランが使われたニュースも耳にしました。世界のあらゆることのなかに眼差しをそそいで、そのなかに私たちの神戸があった、一九九五年一月十七日から一日一日の日常が流れ、その積み重なりの上に今日という圧倒的な二十年目があったのであって、二十年というそこだけを考えても何の意味もない。そういう捉え方をする必要があるのではないでしょうか。あんなに大きな地震の原体験者として、詩を書く立場から、詩人の想像力を駆使して私たちは、神戸だけではない、日本だけではない、世界の同時体験の中で神戸はどうだったかを考えることが大事なのではないだろうかと私は思います。

震災直後の神戸市長田区の様子（撮影・たかとう匡子）

★作品名と参加会員名

▽「叫び」あだちかつとし▽「時が揺れて」阿部由子▽「そのつぎは」安西佐有理▽「声（波のように）」井上修子▽「グラウンドにいたプレイヤーの20年間」入江田吉仁▽「祈」岩崎英世▽「鵯越」江口　節▽「寓話を置いてみて」大西隆志▽「なべて去ってゆく」大橋愛由等▽「朝の訪れ」和比古▽「風の中」かただときこ▽「十九歳になった孫Hへ」香山雅代▽「二十歳」神田さよ▽「業に苛なまれ」川田あひる▽「糸」小西民子▽「空中に置いた片足」佐伯圭子▽「再起した神戸」佐藤勝太▽「おどろく」在間洋子▽「この二十年」直原弘道▽「封を切って」たかとう匡子▽「声」高橋冨美子▽「あの日から」たかはらおさむ▽「死不起」谷田寿郎▽「風化」玉井洋子▽「おばあちゃんの下駄」玉川侑香▽「海峡の駅はいま」土屋宣子▽「変わりゆく色彩」中川道子▽「新しくなった扉のまえで」中島妙子▽「この場所で」中堂けいこ▽「阪神・淡路から東北へ　被災二十年に導かれ」西海ゆう子▽「炎のトルネード」西村好子▽「避難所」野口幸雄▽「兵庫」平岡けいこ▽「輝く月に」福田さとる▽「光　ひと房」福田知子▽「窓の在り処」福永祥子▽「美談」藤井　清▽「沈黙の先へ」丸田礼子▽「20年を経て」三浦照子▽「あの日」水こし町子▽「うなだれて思うあのあと」三宅　武▽「祈り…分断と再生」山本真弓▽「pass away」由良佐知子▽「過ぎ行く時間を」凛　清太▽「消えない虹」渡辺信雄

★「阪神・淡路大震災から20年を想う」特別号は兵庫県現代詩協会HPで閲覧できます。

講演をする藤井貞和氏。会場のハイビスカスの間は参加者でいっぱいになった

5日の昼は曇ってはいるものの予想より穏やかな天気だった。心配を他所に参加者は65人あった。これは前回の詩のフェスタひょうごより少し増えている。

第一部の講演会と質疑応答の司会は大橋愛由等がつとめた。熱心なフリートークが続き、終了したのが2時50分だった。引き続き第2部は休憩をはさんで玉井洋子の司会進行で3時に開催となった。朗読者は8名を予定していたが3名が欠席して、おぐりひでお、大倉元、野口幸雄、平岡けいこ、香山雅代、そして飛び入りで中嶋康雄、高谷和幸が朗読をした。詩のボクシング経験者のおぐりさんの香具師口調、大倉さんの腹話術を絡めた詩などいつになく多彩な詩の朗読会になった。4時にプログラムはすべて終了し、その後講師を囲んで親睦会をニューミュンヘン神戸大使館で持った。参加者は21名だった。台風は幸運にも神戸への直撃を免れて、スタッフ一同が安堵した一日だった。

③〈報告〉「藤井貞和さん講演会―演題「詩は抗う地球のノート」」報告者・中堂けいこ

話は今も続く福島原発の問題、二十年をむかえる阪神・淡路大震災、近々におきた御嶽山噴火による災害など日本列島に住む私たちが避けて通れない様々な厄災について展開される。

〝十二月八日青天のひと日暮れて普賢岳の火おしくだるなり〟
（竹山広「一脚の椅子」）

なぜ御嶽山の入山規制が行われなかったのか。それほど予知は難しいことなのか。専門の学者は予兆の情報を事前には決しておもてにしない、という不文律に一石を投じる。ネットで公にすれば大勢のひと、たとえば中学生の地学オタクのような少年がなにか提示できるかもしれない。可能性は試されるべきではないか。

福島原発の電源喪失は早くから高木仁三郎が予言していた。そのことと地下構造から火山地震両方から考えていく必要がある。福島県（東北）は縦に左に火山帯、右に水系とわかれ、水袋のような阿武隈山地は地下水脈で福島原発の下を流れ太平洋にそそいでいる。詩の書き手の夢想の可能性として、阿武隈の水が再臨界の防止をしているのかもしれない。これは、〝地面の声〟だろう。御嶽山の噴火と同時にあまり知られていないが桜島も大噴火を起こしている。原発はこわいから反対、から一歩踏み込んで、地質学者火山学者ら科学の人々の良心をゆさぶり声を上げていきたい。

神戸の地でI・17から20年を思い、この地の近代詩…ことばをほりさげていくアバンギャルドな詩風土を思う。ここで近代詩人を引用。宮沢賢治の『政治家』。〝どこか透明な／地質学者が記録するであろう〟。また佐川ちか『室楽』ジョイス翻訳と中原中也『プリュッセル』ランボウ翻訳に触れ、翻訳は原語の韻律を放棄しながらも微細なニュアンスを日本語の韻律にひきよせるという二重の構造をひきうけ現代にいたっている。今、これを問い直すことでなにか見えてくるはずだ。私たちは日本語で書くしかないのであるから。

福島原発以後、画家の富山妙子は告発と祈りの絵を描き続ける。しかし一方で忘却をたどる日本全体の空気に怒り、屈折を抱える苦悩をコラージュの写真で示す。妙子の絵をシカゴ大学のサイトで紹介。

和合亮一『詩ノ黙礼』は将来かならず評価されねばならない。〝私たちの精神の髪を、誰か、梳かしてください。黙礼。下略〟

④〈報告〉「第三回読書会―萩原朔太郎の詩と表現世界について―」報告者・安西佐有理（別枠に表示）

⑤〈報告〉「第四回読書会―藤井貞和の詩と表現世界について―」報告者・安西佐有理（別枠に表示）

⑥〈エッセイ〉「矢と歌」鈴木漠

⑦〈エッセイ〉「福山のお天気」福田さとる

⑧〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽高谷和幸『シアンの沼地』▽福永祥子『立方体の空』▽季村敏夫『膝で歩く』▽鈴木漠『続続　鈴木漠詩集』▽田中信爾『音の変幻』

⑨会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌／他県詩人団体発行本

⑩〈作品（詩）〉「故障」関はるみ

⑪〈訃報〉児玉勅顕

④〈報告〉「第三回読書会―萩原朔太郎の詩を読む―チューター時里二郎」２０１４年５月31日」
報告者・神田さよ

朔太郎を「星座の中の朔太郎」という観点から述べる。朔太郎は明治41年に『早稲田文学』に「詩界の根本的刷新」を書いて、口語自由詩の必要性を説いた。大正3年～6年には口語自由詩の重要な詩集が集中して発行された。自由なリズム、行と連との制約の廃止、あらゆる既存の観念を破壊する、そのような時代的気風があった。詩が熱っぽく語られた時代であった。当時口語自由詩は散文的なものが多かったが、朔太郎は行替え詩、口語自由詩の心臓部となる内面のリズム本位の詩を主張した。内面のリズムをどう言葉に翻訳して詩にするのか、イメージを鋭く強烈なものにしなければならなかった。その時代の星座の中で朔太郎は一つの星となって詩を書いた。特に山村暮鳥『聖三稜歯玻璃』の影響が強い。散文との違い。詩となるものは何かを追及していった。

『愛憐詩篇』から『月に吠える』を書いたころ。詩集のまえがきは長く、詩に対する思いの深さを知ることができる。地上の見えないものを表現してゆく、それは自己の感性の表れであり、普遍的なものである。この頃は、まだ文語の部分が残る作品がある。口語自由詩は朔太郎にとって生涯のテーマとなる。

『青猫』では「リズム本位の詩」の変質が窺われる。一行も長くなり、散文へ接近をしている。『月に吠える』におけるイメージの力は衰え、退廃的となり、濃密な官能性が表出している。

『氷島』を書いたころは、生活の破綻という状況で、「民衆詩派」や「詩と詩論」に属する詩人たちと論争をしたことは、時代の詩の流れに沿わないものが朔太郎のなかにあったと思われる。昭和13年にはエッセイ「日本への回帰」を書き、西洋文化を経た知性は日本へ回帰すると綴った。

朔太郎に対する評価として鮎川信夫、飯吉光夫の批判なども提示された。

『月に吠える』「『青猫』『氷島』と詩集の流れに沿って話は進められ、朔太郎の主張や詩の特徴など、確認することができた。〈第36号〉

⑤〈報告〉「第四回読書会―藤井貞和の詩と表現世界について―チューター大橋愛由等」２０１４年７月20日
報告者・安西佐有理

「藤井貞和氏の、詩に向かう姿勢は《臨床詩学》といえるのではないだろうか。彼に通底しているのは、事態に寄り添うことであり、アンガージュマン（参加）の実践を心がけていることだ。」

物語学（源氏物語ほか）、古日本文学発生論等で国文学の新しい分野を切り開いてきた「学匠詩人」が、東日本大震災など折々の状況に心を寄せて行動しつづける人でもあることを語るチューターの大橋愛由等さんは、常任理事であり藤井氏著書の出版を手掛けた実績も持つ。本年度の「詩のフェスタひょうご」講師として藤井氏を招聘するのに先立ち、同氏の業績と人柄にふれる機会となった。

藤井貞和氏（一九四一～）は、東日本大震災直後から和合亮一氏がツイッターで発信した言葉をまとめた『詩の礫』への批判に対して、擁護をした数少ない詩人のひとりである。かつて湾岸戦争を題材とした作品で、当時のマスコミや、現実に対して「詩は無力」と主張する立場の詩人に対して批判を展開した背景もある。

藤井氏は、現代詩の〝伝統の否定〟と実験精神のあいだで、単に伝統を否定するのではなしに、現代に立脚して現代詩に立ち向かっている（配布資料には、初期詩篇から「動物の浄土」引用）。思索と実践は、時制だけでなく人称にも及ぶ。アイヌ語研究などで第四人称の可能性を論じており、自身の詩「加那や」では第四人称の世界を描いている。ひとつの物語の内部で、ゼロ人称の作者が、人称の異化を経て、登場人物の内面である四人称へいたる過程は、詩人であり物語研究者でもある藤井氏の真骨頂といえるだろう。

藤井氏の詩、評論、学問をつらぬくのは「うた」かもしれない。たとえば3・11を想うときも「このときに柳田ならば、どうしたろうか／折口はこのときに何をしたろう。不覚」（「旋頭歌　まがつ火ノート」）等と藤井氏自身が書くように、折口信夫や柳田國男ら、国文学、民俗学の先達の仕事とも重なる。

最近では『東歌篇―異なる声　独吟千句』が口語現代詩でなく短歌・旋頭歌形式で書かれたのは、伝承形式を否定しない藤井氏らしい実践であり、「うた」の発生、意味について考えさせられる表現であった。そうした意味で同書での、藤井氏の叫びのようなことばには、現在に結びつく仕事をしようとする姿勢と、日本の状況悪化への危機感が表れている。阪神・淡路大震災から二〇年を迎えようとするこの地の人々の心象も感受して、兵庫の詩人たちと活発に語り合ってくれることだろう。〈第36号〉

★第37号―①（2015年7月1日発行、8頁）

①〈報告〉第19回定期総会について
▽新役員＝〈会長〉たかとう匡子（副会長）時里二郎（事務局長）神田さよ〈イベント・文学紀行〉（会計）野口幸雄（常任理事）大橋愛由等（ホームページ・出版）／大西隆志（イベント）／尾崎美紀（入退会・名簿・記録）／玉井洋子（読書会）／中堂けいこ（会報）／丸田礼子（ポエム＆アートコレクション展）（理事）梅村光明／神尾和寿／季村敏夫／小西民子／高谷和幸（監事）谷田寿郎／渡辺信雄（顧問）伊勢田史郎／直原弘道／福井久子／安水稔和
②〈報告〉総会　第二部鈴木豊子『シェイクスピア　出会いとその謎講演要旨　報告者・時里二郎
③〈報告〉「第五回読書会―茨木のり子の詩を読む―チューター丸田礼子」２０１４年７月20日　報告者・尾崎美紀
④〈報告〉「第五回読書会―吉野弘の意味の揺れ―チューター神田さよ」２０１４年７月20日　報告者・高谷和幸
⑤〈報告〉「第４回ポエム＆アートコレクション展の報告」＝年始恒例のポエム＆アートコレクション展が神戸文学館で１月11日～24日の日程で開催された。今年は阪神・淡路大震災からちょうど20年目にあたることから、１月17日、会報特別号をテキストにした記念のシンポジュウムが開催された。今号によせられた45の詩編から講師のたかとう匡子さんが読み解き、特別号の編集者でもある大橋愛由等さんが総括。そこには、大震災から20年たち、その間には東北大震災という私たちの経験をはるかにこえる大惨禍を経てなお、変わらない固有の傷みが詩意識のそこに厳然と息づいていた。
⑥〈報告〉「第３回文学紀行報告」＝３月15日向かった先は、丹波篠山と生野銀山。３月15日〈日〉参加者は28名だった。
⑦〈評論〉「萩原朔太郎と神戸」季村敏夫（別枠に表示）
⑧〈書評〉「会員の詩集から」時里二郎／▽安水稔和『有珠』▽安水稔和『春よめぐれ』▽佐藤勝太『ことばの影』▽青木左知子『身代わりたち』▽江口節『果樹園まで』
⑨会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌／他県詩人団体発行本
⑩〈訃報〉桂あさみ

⑦〈評論〉「萩原朔太郎と神戸」

季村敏夫

萩原朔太郎と神戸のつながりをたどってみる。今や忘却された感のある二人、香山小鳥と大槻憲二が神戸に関わりがあり、両者は細い糸で萩原朔太郎を神戸へ導いている、とこう書けば強引であろうか。夢想であろうか。

明治末年の神戸から出ていた文芸雑誌に『歓楽』がある。創刊は明治四十五（一九一二）年四月（この年の七月三十日に大正に改元）。編集発行人は山本久吉、発行所は歓楽社（神戸市下山手通四丁目二八番屋敷）。山本久吉とは何者か、詳細は不明。扉と裏表紙に、香山小鳥の描く絵があり、いちはやく『歓楽』を注目した紅野敏郎（『雑誌探索』）によれば「女と五月」という詩（七月号）を発表している。香山小鳥は萩原朔太郎を震撼させた田中恭吉（一九八二―一九一五）の友人である。

『歓楽』10月詩歌号　1913年発行　立命館大学図書館蔵。

田中恭吉装画「開梱」「月に吠える」初版本の収載。

うつそみははかない。時間とともに忘れられる。香山小鳥に至っては少数の美術史関係者が知るのみである。本名香山藤禄（一九八二―一九二二）、芥川龍之介と同世代。結核で死んだ。生まれは長野県下伊那郡松尾村、なぜ神戸の雑誌に寄稿するようになったか、これまた不明である。昭和六十三（一九八八）年に「竹久夢二とその周辺」展が開催、竹久夢二を軸に香山小鳥、田中恭吉、藤森静雄、恩地孝四郎らの交流が明らかになった頃から朔太郎の処女詩集『月に吠える』の詩画集としての視点が確立された（田中恭吉らの自刻版画やアヴァンギャルドとしての同人誌活動を研究してきた和歌山県立近代美術館の井上芳子、三木哲夫、熊田司氏らによる）。

大正四（一九一五）年六月、萩原朔太郎は恩地孝四郎に私信を投函、初めて上梓する詩集を田中恭吉の版画で飾りたい旨申し出る。朔太郎は恩地孝四郎らの木版画と詩の同人誌『月映』を手にし、魂のおののきを感じた。恭吉は、木版画は無理だがペン画ならと承諾したが、喀血に苦しむ病状は重くなり、十月、和歌山県の自宅で絶命（享年二十三歳）、『月に吠える』を手にすることはなかった。あくる大正五年の十月、朔太郎は恩地孝四郎に詩集の装丁を依頼、そこに、「今度の詩集は故田中恭吉氏の追悼記念の意をかねた出版」であると記した。『月に吠える』の附録に朔太郎は次のように書いている。

雑誌「月映」を通じて、私が恭吉氏の藝術を始めて知ったのは、今から二年ほど以前のことである。當時、私かあの素ばらしい藝術に接して、どんなに驚異と嘆美の瞳をみはったかと言ふことは、殊更らに言ふまでもないことであらう。實に私は自分の求めてゐる心境の世界の一部分を、田中氏の藝術によって一層はつきりと凝視することが出来たのである。

もう一人、大槻憲二（一八九一―一九七七）。大槻は東京美術学校時代から田中恭吉と深い交わりがあった。神戸との関わりをいえば、明治天皇崩御の数日前、神戸幼稚園（北長狭通六丁目）で洋画日本画展覧会を開催している。このこともさることながら、フロイトと文通、翻訳を手掛けている（春陽堂版『フロイド精神分析学集』）。江戸川乱歩は憲二主宰の東京精神分析学研究会に出入りしていた。また神戸詩人事件で拘束された岬絃三は大槻憲二への関心（『滑車』二号）を隠さなかった。

田中恭吉（田中未知）は『月映』Ⅵに短歌を発表している。タイトルは「ゆめの日のかげ」。自らの作品の前に、香山小鳥の絶唱十首を掲げている。三首ひく。

赤石のみねのかなたぞあこがれのわがゆくかたと夕雲をみる
白きひと列なし哭きてゆくがみゆ青ざめはてし胸のこみちを
生くといふわがよろこびは窓玻璃の小さき羽虫のふるえへにぞ似る

『月映』は柄澤齋氏や時里二郎氏らの『容器』の前身である。会員の紫野京子氏の『夢の周辺』（月草舎）に恭吉に捧げる一章（「ひとつの星を領して」）がある。

〈第37号〉

兵庫県現代詩協会　会報第53号　特別付録

会報バックナンバー③

■発行所＝兵庫県現代詩協会事務局《野口幸雄》〒657―0846 神戸市灘区岩屋北町４―４―５―９０２ Tel.０９０―７９６３―００９０
▽発行人＝《時里二郎》（兵庫県現代詩協会会長）
▽会計＝《玉川侑香》
▽会報特別号・責任編集＝《大橋愛由等》／編集協力＝《安西佐有理》
■印刷＝《遊文舎》〒532-0012 大阪市淀川区木川東４―17―31 Tel.０６―６３０４―９３２５

■編集あとがき＝兵庫県現代詩協が発行する会報53号の特別付録「会報バックナンバー③」です。28号から37号まで収録しています。さらに阪神・淡路大震災から20年が経過した２０１５年にあわせて発行した会報特別号「阪神・淡路大震災から20年を想う」も紹介しています。今あらたにバックナンバーを読み返してみますと、当時の会報制作担当者の編集企画能力の高さに感嘆するばかりです。われわれの協会の会員動向ばかりではなく、ひろく兵庫県の詩史に関する重要なアーカイブの文章・評論も含まれています。また誌面の都合上、残念ながらこの③号に掲載できなかった文章にも優れた文章・作品が多かったことも付記しておきます。（大橋記）